0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5

特106
526

雪

なりゆき　川波　「はつ夏」
おえいさんの事
雪

久保田万太郎作

なりゆき

一

暮から病人になつてしまつた政次郎は、春になると、ふと急に思ひたつて、小田原へでかけた――

二時頃、築地の醫者のところから、すぐに新橋へまはつて、政次郎は汽車へ乗つた。――しかし急と云つたら、本當に急に思ひたつたので、出かける二三時間前までは、まつたくそんな氣はなかつたのである――朝、起きるとやつぱり昨日のやうに炬燵へ這入つて

午前一杯、全くぼんやりしてゐた。新年の雜誌を、あつちこつち讀んで見たり、年始狀の出しそくないを書いたりしてゐた。熱を計つて見ると、昨日よりもずつと下がつてゐた――しづかな春で、明るい日が一杯縁側の硝子戸にあたつてゐる。空は水のやうに青くうららかに晴れてゐる。さうして遠くで羽根をついて遊んでゐるのが、夢のやうに聞こえて來た――

政次郎はなんだか、たいへんに頭腦が輕くなつたやうになつた。夢のやうにぼんやり氣がかるくなつて、不圖何處かへ――海のそばか何かへ、二三日行つて遊んで來たいやうな氣になつた。

『お母さん、私二三日小田原の方へ行つて來ちやあいけませんかね。』と、云つて見た。

『小田原の方へ――行きたけりやあ、行つてお出でだけれど、無理をしてまた惡かないかい。』

『しかし、こんな風にして家にぶらぶらしてゐたつて、仕樣がありませんものね。』

『ぢやあ先生にきいて見て、先生がいいと云つたら、行つておいでな。――だけど、お店の方はいいのかい。』

『ええ、店の方はどうにでもなるんです。』

政次郎は、ふと何んかとつさに思ひついた事を、すぐそのとつさに定めてしまふ――行かうと、ふと思つたら急に何んだが行きたくなつてしまつた。それからすぐに、雜誌を二三冊と、旅行案内と、日記と、それから何處かへ行くときにはきつと何處へでも持つて

行く『蝶』と『笛』とを本箱から出して、手籠の中へ入れた。さうしてもう何處へでもすぐ出かけられるやうに仕度した。

すつかりもう仕度をして、京橋の醫者のところへ行つた。

『二三日遊んで來たいと思ふんですけれど、どうでせう、いけませんかしら。』と、聞いて見ると、

『さあ――熱ももう取れたやうだから、行きたけりやあまあ、行つていらつしやい。』と、我儘のきく代診が許して呉れた。さうして四日分藥をこしらへて呉れた。

政次郎は道々、車の上で旅行案内を擴げて見ると、二時何分といふ國府津行と、三時何分といふ下關行とがあつた。下關行といふ

方は急行である、――立つ前に一度狹山に會つて行きたいと思つたので、政次郎は停車場へ這入るとすぐ、狹山のところへ自働電話をかけた。

『これからね、今すぐ小田原へ行く――』と云つた。

『小田原へ――今すぐ――何時の汽車で。』

狹山は驚いたやうに訊いた。

『汽車かい、乘りやあ、もうすぐ出るのがあるんだけれど、行く前に一度、會つて行きたいと思つてね――』

『ぢやあすぐ、停車場へ行くけれど――間に合はないかい。』

『來て呉れるかい。來て呉れりやあ、ひと汽車待つから。』

『ぢやあ、すぐ行く――』

『ぢやあ待つてるから――』

電話を切ると、政次郎は、待つてた車夫に家へ言付をして歸へした。それから東洋軒へ行つて、紅茶を飲みながら、これから小田原へ行くといふ端書を、はつ子のところへ書いた。本當なら、今日ははつ子と吉彌に會ふ筈になつてる日なのである。――紅茶の強い、濃い匂をかぐと、やつぱり何んだか病人らしい心持がした。

やがて階下へ下りると、もう下關行の改札を初めてゐた。もう狹山が來る時分だと思つて、すぐに政次郎は切符を買つて、中へ這入つた。

世間は春でもなんでも、やつぱり汽車へ乘つて、旅なんかする人があるもんだと、政次郎は思つた。中には箱根あたりへ、泊りがけで遊びに行くらしい連中も見えるが、たいがいはやつぱり何か用でも抱へて、遠い國へ旅をする人たちらしい。相變らず見送りや何かが、ぞろぞろプラットフォオムの中へ這入つて來た。

政次郎はなりたけ食堂車に近い二等室にのつて、窓から顔を出して狹山の來るのを待つてた。すると直き眞黑な人波の中に狹山が急いで來るのを見つけた。

『狹山、狹山。』と呼ぶと、狹山はすぐ氣がついて、此方へ寄つて來た。

『遲くなつた――待つたらう。』

『まだそんなに、遲かあないよ。――まだ十五分ばかりある。――だけど、急だつたから驚いたらう。』

『驚いたよ。だつて昨夜會つたとき、君は何んともそんな事を云

つてやしなかつたものね――だけど、身體は如何――』

『あゝ、今日はたいへんに工合がよくつてね――だもんだから、家にゐるのが嫌になつてしまつたんだらうけれど――如何だい、お前さんも一緒に行かないか。』

『そんな事を云つちやあいけない。さうでなくても、先刻電話がかかつた時から、一緒に行きたくなつてゐるんだから――』

『そんなら來たらいいぢやあないか。一人で東京に殘つてたつて、何んにも面白い事はありやあしないよ。』

『だから私もさう考へてね――さうでなくつても、いい加減、調子が狂つてるんだから――どうせ後から、きつと追つかけて行くよ。』

『何時來るい。』

『何時來るつたつて――行けば、明日か明後日行くよ。』

『いつそ、今すぐ行つちやあ如何だい。』

『さう、一緒に行つてしまはうか。』と、狹山は笑つた。

『とにかく今夜家へ歸つて、出かけるやうにすつかり用を片付けてしまはう。――君は別に何にも忘れた用はないかい。』

『別に何んにもない』

『あゝ、それで例の羽子板だがね。』狹山は思ひ出したやうに云つた。『君が此方にゐないとしたら、あれはどうしたもんだらう、愚圖愚圖してゐると、松がとれてしまふからね。』

『あゝさうか、あれがあつたね、私はすつかり忘れてた――』と、政次郎が云つた。政次郎は暮に、壽美藏と莚若の、「およねと十吉。」

の羽子板を四枚拵らへて、それを狹山と、小てると、自分とで、一枚づつ分けることにして置いた。それを政次郎が急に病氣になつたので、羽子板は出來たけれど、まだそのままになつてゐる――

『さうだね、本當に松がとれてしまつちやあ、何んにもならないから、ぢやあ小包かなんかにして、今夜にでもすぐ、「濱町の家」まで、届けて置いて呉れないか。』

『「濱町の家」へかい。さうだね。それぢやあ今夜かへつてすぐ、さういふ事にしよう。』と、狹山が云つた。

政次郎と狹山とが話をしてゐる少しさきの窓には、四十恰好の、黑い洋服を着た男が顏を出して送りに來た親戚らしい二三人と、しきりに話をしてゐた。話の樣子で考へると、中學校の敎師か何

んかで、今度東京を止めて、何處か遠い地方へ轉任でもして行くのらしい。圓髷に結つた、たいへん若い細君と、小さな女の子を一人連れてゐる。――何んだかその樣子が、今東京を離れたら、一生もう二度と東京へ歸つて來られないやうに、寂しく見えるので、

『春早々から、遠くへ行く人もあるんだね。』と、狹山が云つた。

『遊びに行くのとは、少し譯がちがふんだね。』と、政次郎が云つた。

『もう、そろそろ時間だらう。』

『ああ、もうすぐだ。』と、政次郎は時計を見た。

『ぢやあ、なりたけ都合して、明日來るやうにしてお呉れね。』

『ああ、たいがい行く。』

『時間表をやらうか。』と、政次郎は、外套の衣兜から旅行案内を出

して、狹山に渡した。

途端に、汽車が動き出した。

『ぢやあ左樣なら――』

『ぢやあ明日ね――』

狹山はそれから停車場を出ると、急に一人になつてしまつたやうに、無暗にさびしく、張合がぬけたやうな氣になつた。何んだか、電車へ乘る氣もしないので、用をかかへてゐながら、あてもなくぶらぶら、春らしく賑やかな銀座の通りをあるいてゐた。しかし空は朝から、あんまり靜かすぎたのですこし曇つて來た。さうして風もすこし出て來てゐた。

品川、大森、蒲田、――急行だから、汽車はどの停車場も見すごして、どんどん走つてゐた――

政次郎は汽車が動き出すとすぐ、雜誌を出して讀み初めたが、何だか氣が乘らないで詰らないから二三枚讀んで止してしまつた。何だか酷く疲れたやうな工合で、すつかりぼんやりしてしまつた。

不圖、政次郎はこの四五日の經過を考へて見た――考へてみると、この四五日といふものは、まつたく自分を離れて、――はつ子や小てるに離れて、――心配も、苦勞もしないで暮してゐた。さうして、それをまた別に、淋しいとも、情けないとも――苦にも何んにもしないで暮してゐた――

政次郎は、三十日の夕方に、はつ子に會つたことを考へた。――いろいろ暮の用で、朝から車で方々あるいて、歸りに鳥渡狹山の家へ寄つた。なんだかぞくぞく寒氣がするやうだから、早く歸るつもりで、車を待たして置いて、それでも暫らく話しこんだ。すると狹山は、政次郎の顔付が、何處か浮かないやうだと思つて、

『何處か惡いんぢやないのかい。』と、訊いた。

『いいえ、別にどこも惡かあない。ただ少し氣分が惡いやうだけれど、別に大した事はない。』と政次郎は云つた。

『氣をつけなくちやあいけないぜ。』

『大丈夫だよ。』

それから少し話をして、すぐに車に乘つて政次郎は家へ歸つた。

薄曇りの、風がたいへんに寒かつた。

家へ歸つたけれど、政次郎は何んだか落ちつけなかつた。氣分がどうも惡い――滅入つてしまふやうな氣になつて、堪まらなく淋しい――何だか嫌で嫌で仕樣がなかつた。

『すこし外へ行つてあるいて、來ますから。』と、云つて政次郎はまた外へ出てしまつた。

大通りへ出ると、もう薄暗く日が暮れかけてゐた。風が強く吹きつけるので、眞白な土埃が、烟のやうに地面を匍つて上る。――その中を、灯の這入つた電車が、幾臺も幾臺も忙しさうに走つてゐた。さうして人通りが激しい。もう明日一日といふ年の瀬なので、四邊には一面に赤い灯がついてゐる。――政次郎は風のなか

をぼんやりあるいて、切通しの坂をだらだら下りた。

そのうち急に、はつ子に會ひたくなつた。さうして今夜はつ子に會はないと、なんだか自分はこのまんま身體が惡くなつてしまつて、もう暫らく會ふ事が出來なくなつてしまふやうな氣がした——廣小路へ出ると、そこには淺草行の電車が並んでゐた。政次郎は急いでその中の一臺へ乘つてしまつた。

政次郎は公園へ這入つて、すぐ萬梅の前へ行つた。しかし萬梅は休業の札をかけて、今日はもう休んでゐた。

それからすぐに大金の前へ行つて見た。ここの家も大戸を下ろして、今日は休んでた。——何處でも今日は、自分にはつ子を會はして呉れないのだと思ふと、政次郎は果敢なくなつた。情なく

なつた。さうして會へないとなると、餘計はつ子が戀しくなつた。

政次郎は頭腦がすこし痛くなつた。もう、ぼんやりしてしまつて、もと來た道を、疲れたやうになつてあるいた。ふと思ひ切つて、はつ子の家の方へ曲つて見た——するとそこに、はつ子の妹が格子戸の處で掃除をしてゐた。

『姉さんは。』と、政次郎はきいて見た。

妹がよぶと、はつ子は隣の家の格子戸の中から出て來た。政次郎がそこに立つてるのを見ると、はつ子は思ひがけないやうに驚いた。四邊はもう暗くなつてしまつてゐた。兩側の家の軒燈の灯が淡々とついてゐる。通りから離れた新道だから、通りの方の騷ぎはまつたく聞こえて來ない。二人はしづかな夕闇につつま

れて暫らく話をした。

政次郎はそれから一旦、はつ子にわかれて、灯の澤山ついてる通りへ出た。忙しさうにあるいてゐる往來の人達にまじつて、政次郎もその人達のやうに早足であるいた。さうして、はつ子がかんがへて呉れた家へ這入つた。

外二階の六疊の座敷へ通された。——そこで政次郎は、はつ子を待つた。しかし初めて來た家で、女中に顔を知つたのがないのが、何だか便りないやうで落ちつけない。はつ子の來るのが待ち遠しくつて堪まらない。障子をあけて廊下へ出ると、春を待つ表通りにたてられた笹や注連繩が、夜風にざわざわ騒いでゐる。今年ももう暮れてしまふ——と、何だかつくづく思はれた。

暫らくして、はつ子は着物を着かへて、這入つて來た。政次郎は、ほつとした。安心したやうな心持になつた。——裾をひいたはつ子の姿は政次郎には新らしい夢である。さうして、もう一本になつては、恐らく會はなくなるのだらうと思つたのが、機會はさうさせなかつた。一本になつてからわづか一月の間に、政次郎は毎晩のやうにつづけてはつ子に會つてゐた——

女中が立つてしまふと、二人は火鉢を圍んで靜かに話をした。

不圖、時計を見ると、もう九時すぎてゐた。——二人は二人の時間が、莫迦に早くたつてしまつたのにおどろいた。

『今度お目にかかるのは、もう來年ですわね。』と、はつ子が云つた。

『さうね。』と政次郎は返事をした。返事をして、ふとその「來年」の事が心配になつた。――一年といふ長い月日の間――その長い間には、また色々な事が起つて來るのだらう。色んな夢の影がさすのだらう。さうして自分にはそれがどうなるんだか、まつたく解らない。――その長い間には、二人が離れてしまはなければならない日が來るのかも知れない。――政次郎は、色んな果敢ない事や、傷ましい事が、何だかまざまざと眼に見える樣な氣がした。

政次郎は、はつ子と一緒に表へ出た。二人は、默つて暫らくあるいた。さうして公園の入口へ來て別れた。

家へ歸つて、政次郎はすぐに寢た。すると、熱が急に出て來て、頭腦が割れるやうに痛くなつた。春の仕度にかかつてゐた家中の

ものは、政次郎の苦しむのを見ると、みんな驚いて、急に氷で冷したり、醫者をよびにやつたりして介抱した。醫者が來て診ると、熱が四十度近くに上つてゐた。

あくる日の朝――大三十一日の日になると、それでも熱はすこし引いた。しかし一晩のうちに、すつかり身體が衰弱してしまつて、何にも考へるやうな氣力はなくなつてゐた。殆ど終日、うとうとと眠つてゐた。

夕方、狹山が來た。――前々からの約束で大三十一日の晩には二人で一緒に揃つて、京橋のある人の家でやる、「除夜の會」へ行く筈になつてゐたのである。狹山は急にさう病氣になつたとは知らないから、そのつもりで來て見て非常におどろいた。

狹山はそのまま、政次郎の枕許へ坐つて、十時近くまで話してゐた。新年の雜誌の面白さうなのを讀んできかせた。――その讀んでるのをききながら、政次郎はまたうとうとと眠つてしまつた。

一夜あけた、――政次郎が眼をさますと、初空があかるく晴れ亙つてゐて、日影がやはらかにさしてゐた。熱がたいへんに取れて不思議なほど頭腦が輕い。身體の工合も非常にいい。――春だから、とにかく一度起きることにした。さうして、終日ぼんやり炬燵にあたつて、何にも考へないで暮した。

二日の日もなほやつぱり炬燵へあたつて、終日暮した。すると、小てるや、つる代なんかの連中から、年始狀の繪端書が來た。それと一緒に、狹山が一人で約束を果たしに行つて、吉彌と、はつ子と三

人で書いた長い手紙が來た。――政次郎には、それらのものが遠い世間の人達が吳れた、遠い世間の消息のやうに思はれた。

汽車が急にとまつた――もう、大船へ來てゐた。

政次郎はそれから食堂へ行つた。夢から覺めたやうな、靜かな、落ちついた、薄あかるいこころもちになつてゐる。――なんだか考へ深いやうな氣になつてゐた。

『やつぱり、淋しいのかしら。』

洋刀や、肉叉が前に並べられたとき、政次郎は、ふとかう思つた。

茅ヶ崎を越すと、春の海が靑く――白く、遠くに疲れたやうに晴れてゐた。

二

政次郎は、久しぶりで、波の音をききながら眠つた。

翌くる朝起きると、自分の周圍には、誰もゐないで、自分がたつた一人だつた。考へるとこの四五年、こんな日は一日もなくなつてゐた――朝、起きるときから、母がゐる、妹がゐる、店の仲間がゐる、客がゐる――それから、はつ子がゐる、小てるがゐる、狹山がゐる、――自分の側には、誰れかその中の一人がきつとゐる。さうして自分一人でゐることは決してない――

政次郎は中學にゐた時分、身體が弱くつて、たびたびこの小田原へ來た。一度のやうなのは、一年あまり來てゐた。その時分、來るのはいつも一人で來るので、そこには別に、誰も相手になつて呉れるやうな人は、一人もなかつたのである。それで朝から晩まで、一人で暮らした。しかしそれでも、別に淋しくもなんともなかつた。――波の音をきくと、その時分のことが思はれて、そんな心もちが懐かしいやうな――珍らしいやうな氣になつた。

政次郎は東京へ電話をかけた。店へかけて一緒にゐる藤田といふ男に、四五日歸らないことを斷わつた。それから狹山のところへかけると、狹山は今朝もう十時何分といふ汽車で立つたといふ事だつた。十時に立つたのなら夕方には着くと政次郎は思つ

海は終日うす暗く曇つてゐた。さうして波の音が高かつた。政次郎は一人で晝飯を濟ましてから、濱へ出て見たけれど、何んだか心持が落ちつけないので、すぐ家の中へ這入つて、方々の端書を書いた。はつ子へも、吉彌へも、小てるへも書いた。

うす暗く曇つた日は、そのままぢきにうす暗く暮れて來た。其處へ、

『早かつたらう。』と狹山が座敷の中へ這入つて來た。政次郎はふとその顏を見たとき、二人はなんだかたいへん久しい間、會はずにゐたやうな氣がした。

夜、二人は灯火の下で、紛雜な世間からでもまつたく離れて來たやうな、何處か輕るい、しづかな心持になつて話をした。

『昨夜と今朝で、三日ぶり位の仕事を片付けて來た、』と狹山が云つた。

『手紙は五六本書く、小包は出す、電話はかける、――取つて來るものは取つて來て、屆けるものはみんな屆けた――』

『羽子板は屆けて。』と、政次郎が云つた。

『御安心なさいまし、たしかにお屆け申しましたから。』

『どんな風に出來たい。』

『上に襟をかけた着物をきたおよねが居て、下に十吉が白い蓮の花を持つて立つてる圖どりでね、後ろ貼には墨繪で柳が畫いてあつた。』

『押繪の工合は。』

『壽美藏の方は似なかつたけれど、莚若の方はよく似た。――郵便局へ持つて行つたら、三尺以上あるといふので受けつけて呉れない。それからまたわざわざ市内配達へ持つてく騷ぎでね――』と、狹山が云つた。

『しかし、何日かあれが悲しい夢の紀念になるんだね。』と、狹山が續けてふと云つた。

悲しい夢の紀念――政次郎はふと、その「およねと十吉」の羽子板を、小てるが受けとる時のことを考へた。――政次郎は隨分しばらく小てるに會はない。毎日のやうにあれほど會つてたのが、十二月の中旬に大勢の一座で會つたぎりそれつきり、一度も會はない。二日置き、三日置き位に、電話をかけて來るので電話で話をするきりである。――政次郎は小てるに會はないでその後ずうつとはつ子に會つてる――しかし狹山はそんな事は知らない。

『しかしねあの羽子板四枚あるから、一枚殘る譯だけれど、その賣口はついてるのかい。』と狹山が云つた。

『あ、あの殘つたのは構はない、私が貰ふから。』と、政次郎は云つて、ふと狹山の顏を見た。

『さうかい。』狹山は氣にもとめない風だつた。

小田原の町もやつぱり正月だつた。

電車の通りへ出ると、兩側に並んだ料理屋や藝者家が、みんな東

京の眞似をしたやうな松かざりをしてゐた。さうして名物の外郎を賣る見世や、寄木細工を賣る見世の暖簾の色が春らしく新らしい。近くの芝居では、元日から曾我の狂言をやつてゐた。阪東何とかと書いた古い幟や、看板が町の角へ出てゐた。

空が濃くあかるく晴れてゐる。日影が暖かい。――彼方でも此方でも、まだおつくりをしない藝者が、朝つぱらから門へ出て羽子をついてゐる。淺黄色の素袍を着た萬歳が才造と二人で、風祭の方へ行く電車を待つてゐた。

箱根の山脈が晴れた空に續いてゐる。

政次郎と狹山は通りを離れて、御用邸のお濠の方へあるいた。青黑く濁つた水に、空が靜かにうつつてゐた。

藪の中の細い路をだらだら上つた。――廣い馬場へ出ると、霜の下りた枯草の上に、日が一杯當つてゐた。さうしてもう、そこには白い梅がちらほら咲いてゐた。

『もう歸らうか。』

『歸らう。』

それから二人は、御別邸の裏へ出た。青い海の見える蜜柑畑の間を通つて、また細い裏道を町の方へ下りた。

町へ這入ると、政次郎は金物屋を見つけて、そこへ這入つていつた。さうして、小さな餅網と、剪刀とを買つて出て來た。

『どうするんだい』

『かうやつて、一つ一つ世帶道具を買ふのさ。』と、政次郎は笑つた。

宿屋へ歸ると、留守に政次郎のところへ手紙が一本來てゐた。

政次郎ははつ子から來たのだらうと思つた。見るとそれは「よねより」と書いてある――はつ子でなく、小てるから來たものだつた。

『手紙はこれ一本しか來ませんでしたか。』と政次郎は女中をよんで訊いて見た。

『はあ、それだけでご座います。』

『今度の配達は何時です。』

『こんだは夕方でご座います。』

政次郎はふと、がつかりしたやうな氣になつた。――立つとき、停車場から出した端書が、もしか屆かないのぢやあないのかと思

つた、――しかしそれにしても、此方へ來てから出したのが、もう屆いてゐる筈である――

『一本來たらいいぢやあないか。ごらんなさい手前のところへは一本もまゐりません。』と、狹山が側から云つた。

政次郎は、默つてその手紙を讀んだ――

あけまして御目出度御座います。本年もあひかはらず。御手紙もはご板もとどきました。誠にありがたうご座います。

さて御病氣はいかがですか。一寸お伺ひいたします。つる代さんと私しとは、おたくへはがきを出しました。私しは米吉と書き、つる代さんは鈴木と書きました。濱町の家の姉さんも心配して居りますから、なりたけ早くかへつて下さい。

つる代さんといつしよに出すつもりでしたが、をりわるくあへませんでしたから、あとから出すと云つて居ます。狹山さんにどうぞよろしくお傳へ下さいまし。

よねより

十吉さまへ

「午後四時十五分」と書いてある。――政次郎は、夕月のさして暮れる大川端が眼にうかんだ。

政次郎はすぐに、繪端書の返事をかいて出した。

夕方、二人は濱へ出た。

濱からぶらぶら町へ這入ると、曾我をやつてゐる芝居が、賑やかに灯火をつけてゐたので、這入つて見た。

幕があくと丁度由井が濱邊の、箱王兄弟が首をうたれようとするところだつた。畠山重忠をやつた役者は、顏といひ、調子といひ羽左衞門そつくりだつた。

次は中幕で野崎だつた。歌十郎に似た身體の大きい役者が久作をやつた。さうしてさつきの羽左衞門に似た役者は、油屋の後家をやつた。――お染や後家が舟に乘り、久松が駕に乘ると、久作の家がそのまま土手になつて、一杯に浪布が敷かつた。さらばさらばと、舟が出方の男に押されて花道に這入る――それでも段切れの連彈の絃の音は悲しくひびいた。

それだけ見て二人は外へ出た。歸ると座敷の中は片付いてゐて、もう床が敷いてあつた。さうして机の上に三四本手紙が來てゐた。その中の一本は待ち兼ねたはつ子の手紙だつた。――政次郎はふと安心した。

政次郎は急いで讀んだ――

新年御目出たう御ざいます。

先日は狹山さんがいらしつて下さいまして、まことにありがたうございました。元日からあなたのいらつしやるのを、たのしみにしてまつてをりましたら、いらつしやらないのでしよう。もしやなにか、おこつてでもいらつしやるのかと思ひましたから、すぐ狹山さんにききましたらご病氣でおよつて

いらつしやるとききまして、びつくりいたしましたが、ことによつたら、さういつてからかふのかと思ひましたから、いくどもききましたら、ほんとに御びやうきだとおつしやるので、私わるくなつてしまひました。前に思つた事ごめんなさい。今、草津さんのおやくそくがまゐりましたから、一寸いつて來ていいでしよう。せつかく人がかいてゐるのに、いぢわるですわね。こんな事かいてごめんなさい。やつと今かへりました。私こんなにおそくなつて、けふは一人でかへつて來たのです。づゐぶんさびしうご座いました。あなたはけふは狹山さんがいらしつておたのしみですわね。うらやましうご座んすわ。おからだは、たいそうよろしいさうですが、かる

はずみをしてはいけません。なにしろ寒うございますから、どうぞお大事になさいまし。早くなほつて早くかへつて下さいまし。どうぞなりたけ早く。さやうなら。お大事になさいまし。

またこなひだの時間になりました。

一月五日　はつより

まさじらう様

政次郎は一度讀んで、また繰返して讀んだ。

『もう寢ようか。』と狹山が云つた。

『あゝ寢よう。』

『ぢやあ、これを燒いてしまつて、お仕舞にしよう。』狹山は晝間買つて來た金網へ、切山椒を乘つけてたんねんに燒いてゐた。

政次郎は床の中へ這入つたけれど、なんだか眠られなかつた。それから先刻のはつ子の手紙を出して來て、ひそかに繰返して讀んだ。

政次郎は、はつ子が懷かしくつて仕樣がないのである。

新内の流しが階下を通つた。悲しい三味線の音が、しばらく、悲しい波の音と一緒にきこえて來たが、三味線の音はだんだん遠くなつて行つて、ぢきに波の中へかくれてしまつた。

三

それから三日たつて、十日の日に政次郎は東京へ歸つて來た。

――歸る前の日に、狹山と二人は濱をぶらぶら歩るいてるうちに、早川の河原へ出てしまつた。その河原の草の枯れた徑を、何處までも何處までも行くと、紺色の水がいつか白い瀨になつてしまつた。街道へ出るともう風祭のさきで、箱根はすぐ其處だつた。それから塔の澤へ行つて、新玉の湯へ寄つて歸つた。――政次郎も狹山も疲れてしまつた。しかし政次郎はただ疲れたきりで、身體の工合はすつかりもう恢復してゐた。

東京へ歸つて來ると、東京はもう松がとれてしまつてゐた。世間の心もちが、なんとなく穩かにさびしく、悲しく、沈んでゐる。――空もその二三日、なんだか雪にでもなりさうに曇つてゐた。

政次郎は、歸つた翌る日から店へ行つて見た。一日店にゐると忽ち心もちが汚れたやうに疲れてしまつた。それから夕方、或る西洋料理屋から、電話をかけて狹山をよんだ。

すると狹山はすぐに來た。やつぱり張合のぬけたやうな、ぼんやりした顏をしてゐた。

『家つてところは、やつぱりつまらないところだね。』と政次郎が云ふと、

『何んだかかう、おちつかなくつて、淋しくつて、仕樣がない。』と狹

山が云つた。

二人は、それから日の暮れるまで、暗い暖爐の前で話をしてゐた。

政次郎は、歸つたらすぐに、はつ子に會ひに行かうと思つてた。しかし歸つて見ると、色んな都合で、すぐに行かれなかつた。それでやうやく、歸つた三日目の夕方に、店の歸りに行く事が出來た。――その日は店がすこし忙がしくつて、退けたらもう日が暮れてゐた。外へ出ると、角の溜の車が、もうみんな提灯をつけてゐた。

政次郎は持つて來て置いた羽子板を持つて行つた。――狹山と小てると、自分とで分けた殘りの一枚は、政次郎は初めからはつ

子のものと定めてゐたのである。

しかし政次郎は、それをどうしてはつ子へ届けようと思つた。どうしたら誰にも知れないで、はつ子の手へ渡すことが出來るだらうと思つた。

ふとまた家へ持つて行かうかと思つた。しかし其處には、自分の知らないはつ子の「周圍」の人たちがゐる。その「周圍」の人たちは、かならず自分の美しい夢を破つてしまふだらうと思ふ。政次郎は自分の夢をやぶられるのが何よりも怖ろしかつた。

ふとまた暮れの三十日の事を思ひ出した。さうして思ひ切つて、やつぱり家へ持つて行く事にした。――さう決めると政次郎は、何んにももう考へないで、またいつぞやの新道へ這入つた。

政次郎が格子をあけると、やつぱりこの間の妹が出て來た。

『姉さんは。』と、訊いた。

『お座敷です。』

『何處。』

『草津さん。』と妹が低い聲でこたへた。妹はもう政次郎を知つてゐる。――政次郎は羽子板の包を預けるやうにして置いて、すぐに表へ出た。

表へ出ると、思はず政次郎はほつとしたが、同時に端下ない莫迦な眞似をしたといふやうな氣が強くした。――その心持を紛らすやうに、政次郎は急いで大通りの方へあるいた。

草津に行けばすぐにはつ子に會へるのだと思つた。しかし其

處は、大勢と一緒の時や、連れでもある時のほかは、まだ一人で行つた事はない。燈火の徒らに明るい、四邊が徒らにざわざわする、――周圍の人たちが、ぢきに大勢寄つて來て、とても自分の夢を安心して置けるやうな世界ぢやあない。――と云つて行かなければはつ子に會ふ事が出來ない。會はなければこの心持を打切られる――政次郎は草津の門の前を二三度通りすぎて、それから、思ひ切つてその大きな懷かしみのない玄關の前に立つた。

はつ子は外の座敷にゐたので、ぢきに政次郎の前へ來た。しかしはつ子は、政次郎が歸つて來た事をまだ知らなかつた。さうして、平常、嫌ひな家として、ついぞここの家へは來ないのである。――襖をあけて、思はず這入つて來て、はつ子はおどろいてゐた。

政次郎はすぐに羽子板の事を話した。それから、隣座敷の三味線や太鼓の音に圍まれて、火鉢に當りながら、はつ子と、外に來た小さなお酌を相手に小田原の話をした。はつ子は默つて聽いてゐた。

政次郎は、幾日ぶりかで、會ひたかつたはつ子に會つた。さうして果敢ない滿足を得たのだつた。

政次郎がはつ子に會つた翌る日、小てるから店へ電話がかかつて、政次郎がもう小田原から歸つて來たかどうか、訊いて來た。十吉は、その電話へ出て、久しぶりでおよねと話をした。

電話に絆されて、政次郎はその晩、久しぶりで「濱町の家」へ行つた。

春初めてだから、誰か二三人呼んで、賑やかに何かして遊ばうと思つたが、何だか頭腦が重くつて、話をするのも臆劫なやうな氣がしたので、いつもの通り小てると、つる代と二人だけ呼んだ。しかしつる代は來られなかつた。

小てる一人――政次郎はなんだか淋しくつて仕方がなかつた。小てるは、久しぶりで政次郎に會つたのだから、色んな話をし出した。しかし政次郎がさう淋しさうに默つて、何か考へてるやうな顔を見ると、それに引きこまれて、しまひには自分もやつぱり淋しさうに默つてしまつた。

二人はしばらく默つて、火鉢の火をながめてゐた。

『また夏が來るとよござんすね。』と、ふと、小てるが云ひ出した。
『ええ。』と、政次郎も顔を上げた。
『冬はつまらないんですね。どうしてでしよう。』
『どうして。』
『夏時分は隨分面白かつたんですね。やつぱり夏が來なくつちや駄目ですね。』
『なぜさ。』
『今ぢやあ矢の福の庭もあるけませんものね。』
小てるは何にも考へない。――政次郎はなんだか堪らなく小てるがいたはしくなつた。小てるは夏の來るのを待つてる――夏の來るのを夢みてゐる、――併しそこにはまだ冬がある。春が

ある。さうして、また夏が來る時分には、小てるはどうなつてゐるだらう。自分はどうなつてゐるのだらう。――と自分と、はつ子はどうなつてるのだらうと政次郎は思つた。
やがて政次郎と、小てるは、いつもここを出るときのやうに、一緒に外へ出た。空はからりと黑く霧れて、風が強く悲しく吹いてゐる。
『寒むござんすわね。』と、小てるが云つた。
『寒むいね。――あるいちや大變だから、車でお歸りな。』
『ようござんすよ、人形町まで一緒に行きませうよ。』
小てるはコオトを着て、政次郎の外套の袖のかげに、隱れるやうにして並んで歩いた。

久松橋の手前まで來ると、いま明治座がかぶつた後と見えて、河岸の方から人がぞろぞろあるいて來た。

『こんだまた狹山さんやなんかと一緒に明治座へ行きませうね。——連れてつて下さいな。』

『ああ行かうね。』と政次郎は返事をした。

二人は人形町の角で別れた。——小てるは政次郎の乘る電車の來るまで、政次郎のそばに一緒について立つてゐた。

政次郎は家へ歸ると、その日の日記にかう書いた。

十吉とおよねは、その後どうなつた。——壽美藏と莚若は、そ

の後どうなつた。

「およねと十吉」の羽子板は、松の内中およねの友禪の袂のかげに抱へられてゐた。

十吉はおよねに久しぶりで會つた。さうして二人は久しぶりで並んであるいた。大川端の空は霽れてゐた。しかし、風が寒かつた。

この後二人はどうなるのであらう。

政次郎は何だかもう、だんだん小てるから離れてしまふやうな氣がする。——何だかもう離れてしまはなければならないやうな——離れてしまはなければならない時が來たやうな——何だ

かそんな氣がして仕樣がないのである。

二三日たつと政次郎は、狹山と一緒に浪花町の或る古い友達の家へ行つた。それは三四年前まで行き通ひしてゐた友達が、久しぶりで會をするので、政次郎も狹山も、是非來るやうに呼ばれたのである。――政次郎は、狹山と一緒に行く筈にして置いたので、夕方店が退けてから、狹山の店へ寄るのを待つてゐた。

狹山はぢきに來た。政次郎はすぐに羽織を引つかけながら、一緒に表へ出た。

もう五時近いのだけれど、空が碧く晴れてゐるせいか、四邊はまだ何處となく明るい。二人は、人がもう一人もゐなくなつて、汐のひいた跡のやうに靜かな、取引所の横から、兜橋の方へぶらぶらあるいた。

『何時に來いつて云ふんだつけね。』

『何時だか知らない。どうせ灯がついてからなんだらう。』

親父橋を渡つて、葭町通りへ出ると、柳の植わつた兩側に、明るい灯火のかがやきが、ちらちら散らついてゐた。

『とにかく飯を食つて行かう』

二人は電車通りを越して、河岸の方へあるいた。河岸へ出ると、周圍が靜かなだけに、早く日が暮れる。水の上がもう昏かつた。

二人は、「濱町の家」の門を這入つた。

小てると、つる代がぢきに來た。

『隨分しばらくですわね。』と、いきなりつる代が、狹山に人懷つこいやうな調子で云つた。

『どうも暫らく――ご機嫌よう――お目出たうご座います。』と、狹山に云はれて、

『あ、――お目出たうご座います、どうぞ相變りませず。』小てるとつる代は思ひ出したやうに、ちやぶ臺の端へ手をかけて、頭をすこし下げた。

『去年のあの時つきりですね。』と、小てるが云つた。

『あん時、あれから、私達もあすこで下りちやつたんですよ。それから土橋の處のこつちで、甘栗を買つて、食べながらあるいたんですよ。』と、つる代が思ひ出したやうに話した。

『一體それは、いつの話――』と、政次郎が口をはさんだ。

『去年の演伎座の歸りの話なんですよ。』と、小てるがそばから說明した。――去年の暮れに、壽美藏が赤坂の芝居で忠臣藏をやつた。政次郎は、狹山を引張り出して、忙がしい中をわざわざ壽美藏のために判官と勘平を見に行つた。行くとその時小てるもつる代も來てゐた。それから一緒に芝居を見て、歸りには一緒に途中まで電車に乘つて來た。――その時の話である。

『なんだ、隨分古い事を云ひ出したんだね。』と政次郎が云つた。

それから話がだんだん春の芝居の事になつた。

『こんだ壽美藏さんは、そりや可哀想なんですつてね。』と、小てるが云つた。

『どうして。』と政次郎が訊いた。

『聞いたんですけれども、そりやもう貧乏で、貧乏で仕樣がない剝身屋でもつて、それでしまひに死んでしまふんですつて。』

『あら、それから何うして。』とつる代が訊いた。

『お前さんも隨分ね。――それから何うするつて、死んでしまつたものが、何うもなりやうがないぢやありませんか。』

『だつて――』と、つる代が云つた。

『明日、莚若の連中を押しつけられたのはいいけれど、日の都合が惡いもんだから、誰も行つて呉れないんだ。仕樣がないから、どう

とう一枚は私が行く事になつた。』と、政次郎が狹山に云つた。

『あら、あしたいらしやるんですか。もしかすると、私もあした行くんですよ。』と側からつる代が云つた。

『誰の見物で。』

『やつぱり莚若さんのですわ。』

『つうちやん、本當に行くの、――槇さんも行くんですか。』と、小てるが政次郎の顏を見た。

『行くつたつて、明日は店の歸りに鳥渡寄るだけだよ。』と政次郎が云ふと、小てるはふと安心したやうに、また政次郎の顏を見た。

四人が食事をして外へ出ると、日はもうすつかり暮れてしまつ

てゐた。今夜は風がない。空は蒼くあかるく晴れてるのに、川面は夢のやうに白々とほのかに曇つてゐる。――何處となくもう春らしい心もちが、この夜の底にゆるやかにうごいてゐる。

小てるとつる代とは、狹山を中にはさんで何かとりとめのないやうな話をしながら、面白さうに人形町の方へあるいた。政次郎は三人が並んで行くあとから、ひと足遲れて默つてあるいた。もう小てるには逢ふまい――離れていつてしまはうといふ、このごろしきりに思はれる心持が、またそのとき胸の中に暗く動いてゐた。――政次郎はだんだん三人から遠くなつてしまつてゐた。

『槇さんはどうして。』と、小てるがふと立ちどまつて後を振りかへつた。

『早くいらつしやいよ。』と、つる代も振返つた。

灯火の賑やかな人形町の角で、政次郎と狹山は二人にわかれた。

――政次郎と狹山はそれから浪花町へ後もどりをした。

翌る日、政次郎は、正午頃にしばらく身體があいてゐたので、烏渡芝居へ行つて見た。すると、政次郎の母と、政次郎の知合ひの大學生とが這入つてる場所の二間さきに、土地のお酌が四五人來てゐた。さうしてその中の二人は小てるとつる代だつた。

二人は、ふと振返つて見て後ろに政次郎が來たのに氣がつくと、默つて向うをむいてしまつた。しかし、あとの政次郎の知らない二人は、そんな事は知らないので、政次郎が來ない前のやうに、構は

ずふざけたり、喋舌つたりした。

『あれは、どこのお酌なんでせうか。』と、その大學生が云つた。

『さうですねえ。やつぱり葭町あたりんぢやありませんかしら。――隨分よく騷ぐこつてすねえ。』と、政次郎の母が云つた。

政次郎は立つて廊下へ出ると、それを見て小てるとつる代が後から立つて來た。

『昨晩は――』

『なんだ、お前さんも來たんぢやないか。』と、政次郎は小てるに云つた。

『だつて――つうちやんや槇さんが來るつて云ふんですもの、――來たくなつちやたんですもの、――それから昨夜おつ母さんにさう云つて、つうちやちんと一緒に今日來たんです。』

『あの方、槇さんのおつ母さんなんですか。』と、つる代が云つた。

『よく解つたね。』

『だつて――そりやあ解りますわ。』

『怖いでせう。』と、小てるが云つた。

『隨分よく騷ぐつて云つてたぜ。』

『もうなりたけ音なしくします。』と、小てるが云つた。

政次郎は一幕見て、一度店へ歸つた。さうして夕方店が退けてから、また芝居へ歸つて來た。四人はまだ居た。政次郎が歸つて來たのを見ると、今度は氣になるやうに代り代りに時々後をふりかへつて見た。

『君はあの四人を知つてるんでせう。』

何か氣がついたと見えて、其大學生が、政次郎に小な聲で訊ねた。

『いいえ。』と、政次郎は笑つて答へた。

『例のおよねつて云ふのが、あの中にゐるんぢやあないんですか。』

『ゐやあしませんよ。』と政次郎はかう云つて烏渡母の方を見た。

母は氣がつかないやうに外を見てゐた。

四

政次郎は店の友達に誘はれて、日曜に歌舞伎座を見に行つた。

連れは毎日一緒にゐる藤田といふ男と、衣笠といふ男と、それから

藤田と衣笠の家の人達で、政次郎を入れて都合五六人だつた。

非常な大入で、幕の開かない前に、もう場所はどこもかも、ぎつしり詰まつてしまつた。序幕は奴凧の淨瑠璃で、祐經や、朝比奈や、梶原や、虎や、少將が出て來て、花やかな、にぎやかな、いかにも初春の芝居だつた。

一幕二幕すむうちに、藤田と衣笠とが相談して、芝居へ誰れか二三人呼ぶといふ事になつた。政次郎にも是非誰れか呼べと云つた。

『小てるを呼んだらいいぢやないか。』と、衣笠が云つた。

政次郎としてこんな時、こんな處へ、自分の夢を持ちだして、大勢の前に投げ出さうとは思はない。と云つて、この場合、一人異議を

立てる譯には行かないので、吉彌とはつ子と二人へ電話をかけさせる事にした。

『およねさんぢやあないのかい。違やあしないかい。』と、衣笠が云つた。

『いいえ。』と、政次郎が笑ふと、

『へえ、なかなか政さんも氣が多いんだね。』と、何にも知らない衣笠は不思議さうな顔をした。

やがて向うの棧敷へ、五六人の藝者が並んだ。藤田のふさ子や、衣笠の小とみや、その外馴染の顔が二三人、そこへはつ子も、ぢき來た。生憎吉彌は都合が惡くつて、來る事が出來なかつた。

野晒悟助の傘の立て、芝居は九時すぎに打出した。連中はそれ

から、藤田が先だちで、すぐに矢の福へ引上げた。さうして其處でさかんに騷ぎ初めた。政次郎は機を見て、はつ子と一緒に逃れるやうに一足さきへそこを出た。――それでも河岸へ出ると、もう夜は餘程更けてゐた。眞黑な水が灯影を一つ一つ靜かに沈まして眠つてゐた。

二人は兩國公園をぬけて、淺草橋の方へあるいた。

『車にして。電車にして。』と、政次郎は、はつ子に訊いて見た。――今日は一日、芝居で一緒にゐたのだけれど、錄に話をする事も出來なかつた。それを今やうやく、二人つきりになつて、すぐに其のまま別れてしまふのは、政次郎は何だか殘り惜しくつて――いかにも別れたくなかつた。

『あなたは。』と、はつ子が云つた。

『私――私はどうするか解らない。お前さんが車にすりやあ、私も面倒臭いから、ここから車へ乘つてしまふ――』

『私、電車で行きます。』

『電車で行く――ぢやあ私も電車にしよう。途中まで送つて行かう。』

『だけど、そんなに遲くなつて、ようございますか。』

『どうせ遲くなつたんだから、私は關はない。』

『さうですか、濟みませんわねえ。』

それから、二人は淺草橋から、電車へ乘つて、雷門で下りた。仲見世へ這入ると、もう兩側の店舗は一軒殘らず戸を下ろしてしまつてゐた。さうして勸工場の屋根の仁丹の廣告が、暗い空に、赤、青、白と、まだ順々に色をかへてゐた。夜詣りの人が仁王門の方からまだちらほら急ぎ足で歸つて來た。

『隨分寒むござんすね。』と、眞面に風が吹きつけるので、はつ子はすくむやうに胸へ袖を重ねた。

『なぜコオトでも着て來なかつたの。』

『だつて、急ぐのに面倒臭うご座んしたから――』

『亂暴な人だね。――私は外套をきてゐるから、いいから、是れでもしてつたら。』と、政次郎は自分の襟卷をはつ子に貸した。

『隨分そりや急いだんですよ。丁度お湯から歸つて來ると、電話なんでせう。それから、すぐ仕度をして、――髪がこれぢやああん

まり酷うご座んすから、餘程髪結さんとこへ寄つて行かうと思つたんですけれど、そんな事をしてゐて、また遲くなるとたいへんだと思つて、止しちやつたんです。』

『どうもお氣の毒さま。』

『ごめんなさい。』

仁王門を這入ると、世間はもう全く寂しづまつてしまつてゐた。お堂の横の蒼白い瓦斯燈が、夢のやうに四邊を照してゐる。

『今日、私のすぐ前にゐた方が、あれが衣笠さんの奥さんなんですつてね。』と、はつ子が云つた。

『ああ、あの眼のところに鳥渡泣ぼくろのある、――あれが小とみ。』と、政次郎は、衣笠が去年の秋頃、ふとした事で小とみに會つて、それ

からずつと續けて會ふやうになつた事を話した。

『隨分仲がいいんですね。』

『さう見えるかい。』

『ええ、見えますよ。――芝居にゐるときでも、少し見えないと思ふと、いつの間にか衣笠さんと二人で、何だか話をしてゐるんですよ。』

『今はもう兩方で夢中なんだ、ものね。』

『うらやましうご座んすね。』と、はつ子が笑つた。

『うらやましいね。』と、政次郎も笑つた。

二人は、萬梅の角でわかれた。

政次郎は一人になつて、仁王門の方へまたあるいた。仲見世へ

出ると、丁度辨天山の十二時の鐘が冴えるばかりに乾いた石疊の上へ重たい音でひびいてゐた。

『實はね、今夜甲州のお客を何處かへ連れていくんだけれど、今夜は一つ河岸をかへて淺草へ行つて見たいと思ふ。どうだらう、一緒に行つて呉れないか。』

歌舞伎へ行つた翌る日の夕方だつた。政次郎は店がひけてから、何んだか何處からか電話でもかかつて來るやうな氣がするので、火鉢に當りながら新聞を讀んでゐると、衣笠が側に來てかう云つた。衣笠は地方の客を扱つてゐるので、地方から客が出て來ると、いつもそれだけの事をしなければならない。――政次郎は衣笠

にたのまれて、すぐに車へ乘つて店を出た。

政次郎はひと足さきに萬梅へ行つて、色々藝者やお酌の人選をして待つた。すると女中がはつ子は今日は病氣で休んでゐると云ふやうな事を云つた。政次郎は昨夜の事をかんがへた。しかし重ねてききにやると、やつぱり來られる事になつた。

衣笠と、その甲州のお客が來て、何か用談をする間、政次郎はその席を外して、隣の座敷へ來ると、そこへはつ子が青い顏をして這入つて來た。

『濟みません――』と云ひながらそこへ坐つた。

『病氣だつてね。――どうしたの。』

『そんな――どうもしやあしないんですよ。ただ少し頭痛がし

たつきりなんですよ。』

『昨夜寒いんで風邪をひいたんぢやあないか。』

『きつとさうなんでせう、だけど仕方がありませんわ。』と、はつ子は氣のない顔をして笑つた。

衣笠の用談が濟むと、政次郎はまた座敷へ歸つた。それと一緒に、待つてた藝者やお酌がみんな座敷へ這入つて來た。さうして賑やかに騷ぎ初めた。

甲州のお客はぢきに歸つた。衣笠はお客が歸ると急に醉つぱらつて、何でも小とみをここへ連れて來いと云ひ出した。仕方がないので電話をかけさせると、どうしても小とみは來られなかつた。衣笠は非常に憤慨してしまつて、では是からすぐ、この同勢で

赤坂へ出かけようと云ひ出した。政次郎は一人で中へ這入つて困つて了つた。

衣笠が赤坂へ行くと云ひ出したとき、其處にゐた藝者の一人がふと演伎座で勘彌が切られ與三をやる噂をした。丁度その晩は赤坂の演伎座のあく日だつた。――衣笠は勘彌と友達で、勘彌が大の贔屓なので、衣笠はそれを聞くと、今度は急にその氣になつて、ぢやあ是からすぐに勘彌を見に行かうと云ひ出した。もうその時、時計を見ると、十時すぎてたけれど、衣笠は何と云つても聞かないで、すぐに赤坂まで車を云ひつけさした。さうして其處にゐるものをみんな連れて、本當に出かける事になつた。

政次郎は行きたくなかつた。しかしさうなつて見ると、衣笠を

一人離してはやれないので、仕方がなく、あとからやつぱり一緒に行く事になつた。

政次郎が行くとなると、氣分のすぐれないのを無理に、はつ子は一緒に行く事になつた。――政次郎は何だか心許ない氣がした。しかしさうと云つて、この儘一人殘して置きたくはなかつた。

ぢきに、濃く晴れて更けた空の下を、二臺の車はさきに出た四臺の車の後を追つて出た。

六臺の車が、風の寒い、眞つ暗な丸の內を拔けて、やがて芝居に着くと、丁度「切られ與三」の强請の幕が開いてたところだつた。さうして、六人が鶏の中へやうやく落ちついたと思ふと、勘彌の與三と、東藏の蝙蝠安が花道へかかつてぢきに幕になつた。初日だから、芝居はそれで打出した。

六人はすぐにまた車へ乘つて歸つた。もう十二時すぎだつた。――政次郎は神田橋で五人の車にわかれて家へ歸つた。――政次郎は途々車の上で事の經過といふことをかんがへてゐた。

五

政次郎の日記――政次郎の上にはかういふ幾日かが來た。

二月　日、

……

春さきらしい靜かな、おだやかな日だ。だけど何だか物足りないやうな、意地のやけるやうな氣がして仕樣がない。店の暖簾にあたつてゐる日が蔭つて、ドアの硝子の外がだんだん昏くなつて來た。さうしたらもう堪らなく淋しくなつてしまつた。行つても何だかはつ子に會へないやうな氣がする。

――

電話をかけてきいて見ると「吉彌は來られるが、はつ子は來られない」と云ふんだ。思つた通りだ。するとそこへ狹山から電話がかかつて、用がなかつたら今夜鳥渡來て呉れと云つて來た。それから吉彌の方は斷つてしまつて、狹山の家へ行つた。狹山はこの二三日すこし身體の工合が惡いのだ。

二月……日、

日が暮れる。

四時といふ夕方はすぎてしまつた。今日は電話がかかつて來ないのかと思つてたら、急に淋しくなつてしまつた。

ふと氣になるやうな事を考へる――すると堪らなく淋しく、情けなくなつてしまつた。

今夜はどうしても行つて見ようと思つた。――だけど何だか不安なやうな氣がする。――何だかしきりに心細い事ばかり考へられる。行つて見ると、やつぱりはつ子も吉彌も來られ

なかつた。大金にゐるといふ事を聞いて、それからすぐに大金へ行つて見た。するともう歸つてしまつたあとだつた。

――しかしぢきに來られる事がわかつた。

何だか谷からでも雲が湧いて、それが一杯に擴がつたやうな、むしやくしやした心持になつた。來たらそんな心持を話してやらうと思つてると、はつ子は來て、今行つた家のお約束に遲れて、帳場や女中に散々云はれ、座敷で無理に酒を飲まされた事を情なさうに訴へた。眼の色が沈んでゐる。頭痛がするやうに額へ手を當てた。――はつ子は身體が弱いんだ。何だか氣の毒になつてしまつて擴がつた雲はすぐに晴れてしまつた。

二月……日、

今日も相場は高い。さうして滅茶苦茶に忙しい。一時になつてやうやく本場がひけた。

三時頃から雨が降つて來た。日が暮れかかる時分になるとまた降りが強くなつた。廣い取引所の中に映ゆいやうな瓦斯が澤山ついた。その下で群集が波のやうに動いてた。外はもう眞つ暗だつた。店へ歸つて來ると、帳場の人は山のやうに積み上げた傳票の中に埋まつて、夢中になつて仕事をしてゐた。

雨の中を車へ乘つて歸る。――行くと、いつもの座敷に、はつ子が一人で卓の上にうつぶしてゐた。火鉢の側へ坐ると、はつ

子は顔を上げて、うつとりとした目で見て笑つた。

吉彌はまた來られなかつた。――九時うつてから二人は一緒にそとへ出て、雨の降る中を傘をさして並んで歩いた。茶畑の中の瓦斯が雨に濡れて明るかつた。

今日晝ごろに、小てるから電話がかかつたさうだ。あとで聞いた。

二月……日、

……

一時頃、小てるから電話がかかつて來た。これで三日つづけてかかつて來るのだ。しかし生憎いつも居ない時ばかりだ

つた。演伎座の壽美藏の連中へ行かうと云ふのだ。

店の歸りに行くと、丁度中幕の鎌倉三代記が切れるところだつた。舞臺にはもう壽美藏の時姫がゐなかつた。

久しぶりで小てるとつる代に會つた。――二人に會つたのは、先月の明治座つきりだ。

二月……日、

曇つたまんまに日が暮れてしまつた。

いよいよK――が二三日うちに大阪へ行く事になつたので、狹山と三人で一晩潰す約束になつてゐる。五時頃萬梅へ行くと、もうえつ子と、三千代とが來てゐた。ぢきにあとから狹山が來た。狹山はまだ身體が思はしくないと見えて、ぼんや

りしてゐる。今夜ははつ子がいつになく浮き浮きしてゐた。何んだか不思議な位元氣がいい。用があつて電話をかけに行くと、電話口に、はつ子がゐて、さきに何處かの家と話をしてゐた。「――私こんや酔つてるんですから――私こんや何だか嬉しくつて仕樣がなくつてお酒を飲んだの――何しろ、こんなに酔つてるんですもの上れません。」と、後口を斷つてた。その言葉がいかにも、はきはきしてゐた。私は默つて聞いてゐた。はつ子は、電話をきると、私のゐるのに氣がつかないで、そのまま座敷の方へ行つてしまつた。それから電話をかけて、座敷へ歸ると、Kが年をとつた藝者を相手に、清元をやつてゐた。さうしてはつ子は少し離れて、小いとと二人で、低い聲

で何だか話をしてゐた。聞くともなしに聞くと、小いとがはつ子の家の事や行末の事なんか話してゐるのだ。「お前さんもね、是からがまだたいへんだね。――そのうちには、旦那も持たなきやなるまいし、――しかし旦那なんかが出來ると、お客もずつと落ちるだらうしね――」こんな事を聞いたら、ふと高い所からつき落されたやうに思つた、――急に嫌な、淋しくなつてしまつた、心細くなつてしまつた。

狹山は一人離れてぼんやり雜誌を讀んでた。

歸りには雨が降つてゐた。

二月……日、

狹山と二人で帝劇へ行つた。芝居はつまらないから食堂へ

行つて話をした。

狹山はしきりに小てるの事をきいた。さうして、はつ子の事を訊いた。

昨夜、はつ子は狹山に何か話をしたのらしい。

私は狹山の心持をよく知つてる。——よく解つてゐる。……

……

二月……日、

はつ子から電話、是から松しまへ行くところだと、行つた。松しまへ行けば會へるんだと思つて、それから松しまへ行つた。

はつ子はすぐ來た。吉彌も久しぶりで來た。およねに似てゐるといふので、君葉といふお酌はよんで見た。しかし似てはゐなかつた。

はつ子と吉彌は、昨日見た何處かの芝居の狂言の筋を、詳しく話した。私は默つて聞いてた。——なんだか芝居から歸つて來た妹が、いかにも面白かつたやうに、その芝居の話を兄に聞かしてゐる——そんなやうな氣がした。

今夜、私ははつ子に云ひたい事があつたんだけれど、とうとう云ふ事で出來なかつた。

二月……日、

——なんと云つても、すぐの妹が解らないのでせう。氣が利かないんですね。ですから小母さんの氣に入らないんで

す。そこへもつて來て、末の妹がはしつこいと來てゐるもんですから。――すぐの妹は可哀想なんです。何かあると、私は仲へ這入つて困つてしまひます。云へば面倒になりますから、小母さんには何とも云へません。だから善くつても、惡くつても、すぐの妹を叱つて、小母さんにあやまらしてしまふんです。――つくづくおつ母さんがゐたらと思ひます。そんな事を思ふからかも知れませんが、おつ母さんの夢を見たんですよ。何しろ小母さんはおつ母さんとも仲がわるかつたんでせう。それで今まで獨りできたんですから、子供なんか世話した事がないんでせう。――つくづく嫌やになりますよ。それに私はこんなに身體が弱いんでせう。私はきつ

と早死をしますよ。死んだらお葬ひに行つて下さいね。――隨分ばかですね。こんな話ばかりして、藝者のくせに――あさうね、私は藝者ぢやあないんでしたね、――(はつ子の話)

二月……日

明るいうち家へ歸つた。炬燵へあたつてぼんやりしてゐた。かうやつて居れば、何時間でもかうやつて居られるから不思議だ。「大川端」の切拔を見つけて讀んだ。幾度讀んでも面白い。それで色んな事を考へた。君太郎が正雄にとつて、尙且美しい謎であつたやうに、私にとつてはあの初めて會つた藤松が美しい謎だつた。しかしその謎が解けて、夢が破れてしまつたから、私は藤松を捨ててしまつた。

しかし十吉はお米に對して、正雄ほど心の空虛を感じたり、不滿足であつたりしなかつた。――君太郎が一本になる前の晩、正雄は君太郎に逢つてこんな事を云つた。「僕はいつまでもその姿でゐて貰ひたい。」さうして君太郎のお酌姿を死ぬまで忘れまいとするやうに、瞬時も赤い着物から、眼を離さなかつた。――正雄がお酌の君太郎を惜しんだやうに、私もはつ子が一本になるのを悲しんだ。――情なく思つた。さうして會ひに行つた。しかし私は決してあの時、今のやうな日が――夢が來ようとは思はなかつた。――しかしはつ子は、一本になつてから、すつかり樣子が變つてしまつた。はつ子は身體が弱いと始終云つてゐる。たしかに弱い。今

日も、さつき吉彌から電話がかかつて來て、はつ子さんが、今日頭痛がして休んでゐると云つた。腦が惡いんだ。外の座敷で三味線をひいたり、唄をうたはせられたりして來たときは、きつと額へ手をやつてゐる。さうしてその額は青い。眼は曇つてゐる。――そこにはまた色々苦勞がある、心配がある。――始終自分の周圍に對して、細かい注意をしてゐなければならないのだ。

靜かな灯火の下に、二人が向ひ合つてるとき、ふと話が途切れて、兩方で默つてしまふ事がある――そんなとき、ぢつとはつ子の顏を見ると、見てゐるうちに自分もだんだん、はつ子が持つてる心持と、同んなじ心持になつて悲しく沈んでしまふ。

――

藤松は謎だつた。小てるも或る意味でやつぱり謎だつた。しかしはつ子は決して謎ぢやあない、――しかし、やつぱり謎だ。

二月……日、

電話がかかつて大金にゐる事を知つたので、今日もまた何等の不安もなく出かけた。止みかけてはゐたが、まだ細かい雨がしとしと降つてる中を車で行く。

座敷へ通されて、今來がけに買つて來た雜誌を讀んでると、女中がお膳を持つて來て、「はつ子さんは家に來て居りますから、すぐあきます」と云つた。何だか妙な氣がした。

吉彌が來て、二人で話をしてゐると、ぢきにはつ子が來た。昨夜衣笠が小とみを連れて遊びに來た話を聞いた。――小とみはもう商賣をやめて、衣笠と晴れて一緒になるといふ噂がある。本當かも知れない。あの二人には何んの不安も心配もないんだ。はつ子と一緒に仲見世まで來て別かれた。雨上りの鋪石の上に、兩側の灯影が赤々と濡れてゐた。歸ると狹山から手紙が來てゐた、

「――それから私は大勢の人にわかれて、一人になつてその家を出たんです。すこしあるくつもりで、出ぎはにウイスキイを一盃無理にのんで、元氣をつけて出たんです。明るい人形町から、暗い竈河岸に這入つて、それから明治座の

横を通つて、電車通りへ出ました。何だか非常に疲れた様に苦しくなりましたから、もう電車に乗つてしまはうと思つて日本橋倶樂部の前で電車の來るのを待ちました。すると電車がなかなか來ません。いつもなら思ひきつて、また歩いてしまふんでせうが、今夜はもう一足もあるくのが嫌だつたんです。何時までも來るまで待つ氣になつて寒い中に立つてゐました。月が冴えてゐて、空が明るいのです。さうして風が絶えず強く吹いて來ました。ふと私は「舊蹟」に立つてると思つたら、堪まらなく淋しく、情なくなつてしまひました。「舊蹟」――「時代」がなほ幾時時代も幾時代もすぎ去つたあとで、「夢」の滅びたなごりを眼の

あたりに見てゐるやうな氣になりました。もう、およねも、十吉も靜かに過去といふ「夢」の中に眠つてゐる――再び覺める事のない「夢」の中に眠つてゐる――私はとても「おもひ出」に堪へられません。さうしてもう一生、矢の倉河岸や濱町河岸は、「舊蹟」として、私のために悲しく、痛ましい場所となるのでせう――私は今夜ほど君に會ひたいと思つた事はありません――」

終りの方にかういふ事が書いてあつた。「舊蹟」――「覺める事のない夢」これを讀んだら私も急に狹山に會ひたくなつた。考へると、この一週間ばかり、小てるからふつつり電話がかかつて來ない。

三月……日

三月といふ聲をきくと、やつぱり何處か春らしくなつてしまふ。もう花が咲きさうに暖かい硝子戸へ半日暖簾の影がうつつてゐた。皆、明るい、のびやかな顔付をして働いてゐる。

二三日ぶりで衣笠も出て來た。――藤田に云はせると、衣笠と小とみの結婚問題は、話が運びかけて、そのままになつてゐる。さう早くは纏まるまいと云ふ。

はつ子から電話、それが切れるとすぐ狹山からかかつて來た。明日は久しぶりで二人で何處か田舍へ切れに行く事にした。

三月……日

（狹山へ書きかけた手紙――）――ぢやあ申しますが、あなた

はなぜ私が藤松と離れたかご存じですか。ご存じないだらうと思ひます。私はそれに就て何にも申し上げませんでしたから。

さうして、またあなたはなぜ私が小てると會はなくなつたかご存じでご座いますか。ご存じないだらうと思ひます。

私はそれに就て、やつぱり何にも申し上げせせんでした。併し私はいつか申し上げる時があるだらうと――申さなければならない時があるだらうと思ひます。

今日は隨分歩きました。お草臥になつたらうと思ひます。

しかしお天氣が好くつて仕合はせでした。橋場の渡しの流れは、青く霞すんだ空をうつして、いかにも春らしい景色に流

れて居りました。

千住から淺草へ出たとき、何だかそのまんまお別れしてしまふのが、殘りをしい氣がしました。それからまた電車通りを眞直に、淺草橋まであるいてしまひました。――あなたの被仰る「舊蹟」に這入りました。

小てるとつる代に會つたのは、二月の初めに赤坂の芝居に行つた時ぎりなんでご座います。その後一度連れがあつて、百尺へ行つたとき、二人とも來て、會ふ事は會ひましたが、殆ど何んにも話をしないで別れてしまひました。今夜私は、小てるがあなたに云つてる事を、私は側で默つて聞いて居りました。

「槇さんはちつとも來て下さらないんですよ。」と、小てるは云つて居りました。

「毎日毎日電話をかけて責めりやあ、來るんだけれど、お前さんがかけないからさ」と、あなたが云ふと、

「毎日のやうにかけるんですけれど、かけても槇さんは面倒臭がつてゐないと云つたり、出て來てもすぐ切つちやつたりするんですもの」と、云ひました。しかし居るものをゐないと云ふほど私は冷酷ではご座いません。何か一つ惡くなり出すと、萬事が惡く行つて、私が鳥渡表へ出たあとなんかへきつとかかつて來るんでご座います。それからまた、早く切つてしまふつもりもないんですけれど、會はないのでつい

話す事がご座いません。話す事がないから自然早く切れてしまひます。それでも構はず、願にかけて毎日のやうに小てるは電話をかけて來ます。私はよくその心持を知つて居ります。知つて居るだけに、強い事は考へましても、とても思ひきつて自分から別れるなんて云ふ強いことは出來ないんでご座います。考へるといぢらしくつて堪まらなくなります。

「過去といふ、再び覺める事のない夢の中に」――さうかも知れません。さうでご座いませう。しかし私はただ何事も「なりゆき」と思つて居ります。

やがてもう花が咲くのでご座います。さうしてその花が散

るのでご座います。――あなたも「なりゆき」と思召して、ごらんなすつてゐて下さいまし――いづれそのうち、すべてお話してしまふ時が、あるだらうと存じます。

三月……日

今日は市村と明治の初日だ。衣笠から市村を誘はれてゐたけれども、狹山と明治座へ行く約束になつてゐるから斷わつた。併し義理が惡いから鳥渡行きに寄ると、衣笠は勘彌の家の者と、小とみと三人で來てゐた。

一幕見てすぐに久松町へ行つた。まだ序幕もあかなかつた。市村の初日は賑やかだつたが、こつちの初日は全く入りがなくつて淋しかつた。ぢきに狹山が來た。二人は長い幕間を、

薄暗い静かな鶉の中で、火に當りながら話をした。

丁度中幕があいたとき、今日は來られない筈だつたはつ子が、茶屋の男に送られて這入つて來た――私は今日はもうとても來られない――來て呉れないものと思つてゐたのだ。三人になつたら賑やかになつた。

ふと今日芝居にゐて「おもひ出」といふ事をかんがへた。

さうして今日の芝居が、やがて何かの「おもひ出」――果敢ない「おもひ出」になつて殘るんぢやあないかと思つた。

しかし明治座には今までにも、色んな事があつた。

「おもひで」の明治座――左團次、莚若、壽美藏――

それはもう明日すぐ、明日の果敢ない「おもひで」になつてしまふのかも知れない――

三月……日

店の池田といふ男が、何か藤田と私に少し話があるから、今夜向島の入金まで來て呉れと云つた。藤田が行くと云ふから、私も行く事にした。しかし私はまだ機會がなくつて、入金といふ家へ行つた事がない。何だか心細いから、どうしようと思つてゐるところへ、吉彌から電話がかかつた。今夜來ないかと云ふから、實は是々で入金へ誘はれてゐるんだが、一人で心細いから、そつちから二人で來て呉れないかと云つた。すると、自分はあいてゐるから、はつ子の都合をきいて、都合がつくやうだつたら電話をかけて行くと云つた。それで幾らか

心強くなつた。

夕方一度家へ歸つて、車に乘つて出かけた。土手へかかると、靜かな夕靄の中に、ぼんやり向河岸の灯影が散ら散らしてゐた。向うへつくと池田はもう來て待つてた。二人でお湯に這入つて、座敷へ歸つて來ると、藤田がふさ子を連れて來た。矢の福へ寄つて、兩國から蒸汽で來たのだ。ここの名物の蜆汁、饒舌りな女將――つひ近頃讀んだ「秋の一夜」といふ藤村の小說を思ひ出した。そのうちに土地の藝者やお酌が來た。

私は二人が早く來て呉れればいいと思つた。しかし約束した電話もまだかかつて來ない。どうしたんだらうと思つた

が、もう今かかつて來るだらうと思つて三十分待ち、一時間待つた。――しかしまだかかつて來ない。何の音沙汰もない。何が詰らないと云つて、知らない土地で、知らない藝者を相手にするほど詰らないものはない。面白くない。とうとう堪らなくなつて、此方から彼方へ電話をかけさして見た。すると二人ともお座敷へ出てゐると云つた。――九時うつた。もう五分間もゐるのが嫌になつて、歸りたくつて堪らなくなつた。併し藤田も池田も、いい加減醉つてしまつたので、どうしても歸さない。

年をとつた藝者の三味線で、小さなお酌が、さのさを幾つも幾つも踊つてゐた。それを見てゐると何だか淺猿しいやうな

情ないやうな氣になつたから、「もういい」と云つて、止さしてしまつた。それから無理に麥酒を二三杯のんで、何んでも歸ると强情を張つた。藤田と一緒に來たふさ子も、家から電話がかかつて歸る事になつた。藤田や池田や女中や何んかに送られて二人は一緒に外へ出た。

二臺の車が、もういい加減夜の更けた土手を走つた。「さびしいわね」と、ときどき思ひ出したやうに、ふさ子が前の車から聲をかける。「淋しいね」と、私も返事した。

「さやうなら」と、ふさ子が云つたんで氣がつくと、もう吾妻橋へ來てゐた。前の車は河岸について眞直に行つてしまつた。私の車は曲つて橋の上をがたがた渡つた。川の上は眞

つ暗だつた。

「賣られたんだ」と思ふと、もう矢も楯もたまらなくなつた。氣が焦々してどうしても落ちつけない。ふと何處かにゐるだらうから、探がして詰問してやらうと思つた。さう思ふと、すぐ歸る事も、時間の遲い事も忘れてしまつた。車夫に二天門へつけろと云つた。

青白い瓦斯の光が、暗い木の間を淋しく照らしてゐる公園の中を滅茶滅茶にあるいた。さうして宮戸座の前へ出ると、芝居はもうずつと前にかぶつた後で、四邊がしんと沈み返つてゐた。見番の灯火だけがまだ明るい。ふと何だか拍子抜けがしたやうになつた。仕方がなしにまた公園の方へ歸りか

けると、向うから何處かのお座敷の歸りのお酌が一人であるいて來て、擦れちがふと「あら」と云つた。見るとゐつ子だつた。

「どちらへいらしたの。」と云つた。

「向島へ行つたんだけれどもね、詰らないから歸つて來た。」

「それはね――どうせ――でせう。」

「なに――」

「今夜は常磐さんにゐてよ。あたし今までゐたんですけれど、きつとまだゐるでせう。行つてお上げなさいよ。」

「だけどもう遲いだらう。もうお前十一時だよ。」

「大丈夫、あすこは一番遲くつて、十二時がかんばんですから。」

それからゐつ子と一緒に仲見世まであるいた。さうして常磐へ行つた。はつ子はまだゐた。二三人の藝者と一緒に、庭の向うに見える座敷にゐた。ゐつ子が側へ行つて知らせると、すぐ縁側へ立つて來て、此方を見る白い顏が見えた。向うのお客の歸るのが待ち遠しい。ゐつ子を相手に暫らく下らない話をしてゐると、やうやくはつ子が來た。私は默つて口をきかなかつた。ゐつ子が何か取りに立つて、二人になつても、私は何とも云はずに、やつぱり默つてた。はつ子も接穗がなささうに、默つて私の顏を見てゐた。

しかしやがて私は、今日吉彌が、はつ子の家へ行つたとき、はつ子はもう出てしまつた後で、會へなかつた。さうして今しが

たまで會へなかつた事や、やうやく今しがた會つて、初めてその話を聞いた事や、それから直に向島へ電話をかけた事や、その電話がかからなかつた事や、それからすぐにまた二人が別れ別れになつてしまつた事が解つた。はつ子は吉彌と別れて、ここへ來てからも、幾度もかけたがどうしてもかからない。帳場の電話をあんまり使ふのが惡いので、心配してゐた事を話した。

やつぱり會つてよかつたと思つた。然しそれだけの言譯では、まだ氣が濟まない、——もう一時近かつたから、すぐ車へのつて歸つた。もう電車もなくなつてゐた。灯火の明るい大通を自分の車がたつた一つ走るのが何だか心持がよかつた。

疑惑——小さな疑惑——だけど今夜の事は誰も惡いんぢやないんだ、——吉彌も惡いんぢやあない——はつ子も惡いんぢやあない——かけた電話が、かからなかつたんだ、——かけたのだけれど、かからなかつたんだ——ただそれだけなんだ、——だけど併し——解らない——

六

世間は春になつた。日影は日に日にうららかになつた。其處此處の花の噂がだんだんに聞こえ初めた。すると空が暗く一杯に曇つてしまつて、陰氣な春雨が二三日降りつづいた。

十一時うつと、政次郎は、しとしと降る中を傘をさして、晝飯を食べに行つた。歸つて來て、店の扉を開けると、

『槇さん、電話がかかつてますよ。』と、交換手が自分を探してゐた。

『誰れだい』

『知りませんわ』と交換手が云ふ。

政次郎は、はつ子からだらうと思つて、急いで電話口へ出てみると、それは、はつ子の聲ではなかつた。

思ひがけない小てるの聲だつた。

『――槇さんですか――私です、――よねです。』と、低い聲で云た。

『あゝ、わかりました――』

『今私病院にゐるんです――』

『病院に――どうかしたの』

『いいえ、姉さんがすこし身體が惡りいんです。――今それで病院へ鳥渡來たんです。――雨が降つてるんでせう。私さびしくつて、淋しくつて仕樣がないんですよ――』

『そんなに淋しいかい――』

『ええ――でも――家にゐても淋しいから、病院へ來たんですけれど――今濱町の家の姉さんも見舞ひに來てゐるんですよ。――でね、色んな事をきくんでせう。この頃槇さんは、どうなすつたんでせうつて聞くんでせう。――私、困つてしまひましたわ。――何處か、わきへでも、いらつしやるのかなんて聞くんでせう、――そんな事はありませんわつて云つたんですけれどね――私、困つ

てしまつたんですよ、――』

電話がきれぎれにきこえる――

『――今夜いらしやいませんか――』と、云つた。

『今夜――』政次郎は、今日ははつ子からも電話をかけて來る筈になつてゐる事を、ふと考へた。

『――さあね、――いま直ぐやあ、まだ解らないけれど――だけど今夜行かれなきやあ、あしたでいいだらう。』

『――あしたですか――明日ぢやあ――だつて今日は雨が降つてるんでせう、私、今日淋しくつて仕樣がないんですもの――』

『ぢやあね、かうして呉れないか、夕方ねもう一度電話をかけて呉れないか――』

『夕方ですか、――さうですか――ぢやあ家へ歸つて、またあとでかけます。』

『ああさうして呉れないか、――』

『ぢやあ、さうします――左樣なら。』

『ああ――左樣なら』

電話室を出ると、中庭の青々した植込へ、暗い雨がなほびしよびしよ降つてゐた。

雨の日、――病院――姉さんの病氣――自分一人――ふと政次郎は、今夜小てるに會はう――久しぶりで會つて見ようといふ氣になつた。

ぢき夕方になつた。

待つてたけれども、はつ子からは電話がかからなかつた。さうして、小てるからは、約束の通りにかかつて來た。

『ぢやあね、今夜行きませう——』と、政次郎はすぐに返事した。

雨はさつきより、よつぽど小降りになつたけれども、まだ降つてる事は降つてゐた。政次郎は福井へ電話をかけて、それから直ぐに出かけた。

「過去といふ、再び覺める事のない夢」——「舊蹟」——政次郎は、そゞろに或る溫かい心持になつて車へのつてゐた。——車はどんどん雨の中を「舊蹟」の河岸を走つた。

福井へ行くとすぐ、政次郎は車を持たして狹山の處へ迎ひをやつた。

狹山はぢきに來た。——さうして狹山が、女中に案內されて、座敷へ這入つて來たとき、そこに二三人の見覺えのある藝者の中に交つて、小てると、つる代とが、三月前のやうに、「おもひ出」の中に——「夢」の中に、肩を並べて坐つてゐた。

しかし「夢」はやつぱり「夢」だつた。——「夢」の中の福井は、すつかり普請にかかつてしまつて、政次郎が初めて小てるに會つた「菊の間」も狹山がまだ初めて小てるに會つた「茶席」も——夢の中の Scene は、あとなく毀たれてしまつてゐた。

『鳥渡そこを開けて、舊蹟をまあご覽なさい。』と政次郎に云はれ

て、狹山は後の障子をあけて見た、――白々と曇つた朧夜のなかに、廣い、大きな庭が廢墟のやうに横たはつてゐる。

『この頃は毎日、お婆さん達が大勢來て、地形をするんでご座いますよ。一人いい聲のお婆さんが音頭をとると、皆で聲を揃へて綱を引張るんですけれど、そりやあ賑やかで、面白うご座います。』と、女中が側で云つた。

『隨分變つてしまふんだね。』と、狹山は障子をしめた。

『庭がなくなつてしまつたんだよ。』と、政次郎は小てるに云つた。

座敷の柱や鴨居の木の香が新しいので、灯火の影が賑やかに照り添うた。今夜初めて來た藝者が三味線を彈いて、珍らしく小てると、つる代と二人が、「京の四季」を踊つた。

『私は生れて今夜初めて、小てるさんの踊を見た。』と狹山が云つた。

『今夜は特別なんです。』

『今夜は雨が降るからね。』と、政次郎が云つた。

『さうぢやあありませんわ。』と、小てるが云つた。

『もう一生見られないのかも知れない。』

『あら、隨分ですわね。そんな事云ふもんぢやありませんわ。』

『今夜は元氣がいいんだねえ。』と、狹山は小てるの、何處かはればれした顏付を見てゐた。

「夢」――「舊蹟」――

歸りぎはには、雨はまつたく止んでゐた。寒い、冷たい風が吹い

て、さうして河岸には月が出てゐた。兩國公園のところで政次郎の車と、狹山の車が兩方にわかれた。

『左樣なら。』と狹山の方から聲をかけると、

『左樣なら』と政次郎も云つた。

狹山は小てるの今夜のはれぼれした顏をかんがへて、二人の夢をまた彩つてゐた。

再び覺めることのない「夢」が、ふと再び覺めかかつた。——政次郎は、もう再びくぐるまいと思つた「濱町の家」の門を、また再びくぐるやうなことになつたのである。

一月の中旬の、ある夕方、狹山と二人で鳥渡寄つた——それが最後で、それつきり政次郎は、「濱町の家」へ足を止めてしまつた。もうふつつり小てるに會ふまいと、——斷然離れてしまつて、もう會ふまいと思つたのである。

しかし、それは、政次郎は決して小てるに倦きたのぢやあなかつた。小てるが嫌になんたんぢやあなかつた。ただ政次郎は、夢を破りたくなかつた。——「およねと十吉」の「夢」を、いつまでも永く、美しい「夢」にして、殘して置きたかつた。——それがために、別れようとした——離れようとしたのであつた。

「夢」——そこには「夢」の周圍には、始終その「夢」を毀たうとする「苦勞」が、波のやうに寄せてゐる。さうして「夢」は、ど

うしても、――必ず毀たれてしまはなければならない――

政次郎は怖れた。――自ら怖れた。さうして、もう怖れるのに堪へられなくなつて、その「夢」をいつそ過去にしてしまはうと思つた。過去にして、安心を得ようと思つた。――それで無理に小てるに別れようとした。――離れようとしたのであつた。さうして心もちが色々にうごいた。

しかも二人はまだ互に、倦きもしない、あかれもしない二人なのである。政次郎がわかれようとしても、小てるは政次郎を信じてゐた。――固く信じてゐた。

冬がすぎて、春が來た。――政次郎は、とうとう別れることが出來なかつた。

政次郎と小てるは、また「濱町の家」の二階の明るい灯の下に向ひ合つた。さうしておよねが去年十吉のために、人形町で買つて來た茶碗と箸は、また政次郎の膳の上に並べられた。

春だから、二人の大川はおぼろに暮れた。さうして河岸の灯影は二人の思ひ出に花やいだ。

政次郎は、ふと暫らく――かれこれ七日ばかりもはつ子に會はなかつた。こんなに間を置いて、會はないことはない、――政次郎は、何だか非常にながく會はないやうに思つた。しかし、少し會はないでゐると、二人の間は、妙にさびしく離れてしまつたやうに思はれる。ふと、このまんま會はないでゐて、そのまま、ずつと離れて

しまふ――かう思ふと政次郎は、堪らなくなつて、すぐにはつ子に會ひに行つた。

丁度それは、「濱町の家」へ行つて、小てるに會つた翌くる日であつた。日曜の午後で、空は花曇りの日のやうにくもつてゐた。

政次郎ははつ子に、何か旅からでも歸つて來て、その旅の話でもするやうに、會はなかつた間の出來事を、いろいろ思ひ出して話した。すると、はつ子が、その留守の間の話でもするやうに、やつぱり會はなかつた間の話をいろいろした。

『この四日五日、おやくそくがつづいたり何んかして、晝間つから忙しかつたもんですから、鳥渡電話をかけようと思つても、かけられないんでせう。私、いやになつちやつて――』

『今日は』

『今日も、四時のおやくそくが一つあるんですよ、――』

『まだ、いいのかい。』

『ええ、構やしません。――』

はつ子はふとこの頃たびたび呼ばれるお客のことを云ひ出した。

『あの、何時でしたか、向島の歸りに、遲くなつていらしたでせう。』

『あの晩の事をかんがへると、今でも情ない氣がするよ。』

『もうあの時の事――そんな事を云ふのは止しませうよ。』

『ぢやあ止さう、――それで。』

『あの時、向うのお座敷にゐたお客樣に、あれからぢきまた呼ばれ

たんですよ。さうしたら、あの時の事を云ひ出して、この間の、あつちの座敷が何んだのかんだのいつて、色んな事を云ふんですよ。誰れかが何んとか云つたんでせうけれど、私くさくさしてゐるところへそんな事を云はれたんで、もうこんなお客様しくじつても構はないと思つて、思ひきり色んな事を云つてやつたんですよ。

『どんなお客。』

『四十位な、もうお爺さんなんです。そりやあ蟲が好かないつたら、ありやあしないんですよ。隨分色々なことを云つたから、もう呼ばれやしないだらうと思つたら、さうしたら、それから二三日たつたら、すぐ來て、昨夜もまた來たんですよ。――』

『だけど四十位で、お爺さんは可哀さうだよ。』

『だつて話してると、腹が立つやうなことばかり云ふんですもの――』

曇つてうす暗い、しづかな障子のそとに、畫すぎの噴水が落ちてゐた。さうして通りをとほる車の音が遠くにきこえた。――二人はふと話がつきて、そのまま暫らく默つてゐた。

『誰れかお酌でも呼んで遊ばうか。』と、政次郎が云つた。

『さうですわねえ。――お酌さんを呼ぶんなら、あの「茶目」さんを呼んでお上げなさいよ。この間つからあなたに會ひたがつてゐましたから。』とはつ子が云つた。

それから政次郎は、いつか「茶目」といふ綽名のつけた、いつも

よく饒舌る、元氣のいい、お酌の三千代を一人呼んだ。

『まあ――』と云つて、ぢきに三千代がはいつて來た。さうしていつものやうに大きな眼をうごかしながら一人で面白さうに饒舌つた。二人は默つてその面白さうに饒舌るのを聞いてゐた。

政次郎ははつ子にわかれて、何か重い暗らい、心持をもつて一人で外へ出た。もう四時近かつた。

公園の櫻は曇つた空へ白く咲きかけてゐた。――春はだんだん深くなつて行く――

今日は狹山の家へ行く筈にしてあつたので、それからぶらぶら

行くと、狹山は、政次郎が來たら、すぐあとから來るやうに云ひ置いて、明治座へ出かけたあとだつた。

明治座は今日樂なのである。政次郎はそそ、、でもあるんだらうと思つて、自分もあとから明治座へ行くことにした。

電車へ乘ると、前に腰をかけてた一人の女が、政次郎の顏を見て叮嚀に挨拶した。誰れかと思ふと、それは萬梅の女中だつた。

『ああ、しばらく』と、政次郎が云つた。

『永々ご贔屓になりましてすけれど、昨日ぎり見世を閉めまして御座いますから――』と女中が云つた。

『あ、ぢやあもう商賣を止めたんですか。』

『はあ、それで私どもも、昨日つきり、皆暇をとりましたんで御座

います。』

『さうですか、いろんな噂は聞いてましたけれど、――やつぱり行けなかつたんですかねえ。』

政次郎はさつき、はつ子が話したお客のことをふと思ひ出した――今日は、心細いやうな、いやな事ばかり聞く日だと思つた。

『舊蹟がまた一つ亡くなつてしまつたよ。』と、芝居へ行くとすぐ、政次郎は狹山にかう云つた。

今日をかぎりのうす暗い舞臺は、丁度中幕の陣屋があいたところだつた。

七

四月の下旬――花はもう盛りをすぎた。

その花の盛りをすぎた時分に、飛鳥山で公園の藝妓の「お花見」があつた。若い藝者やお酌はみんな、草刈や、順禮や、御殿女中や、お染や、牛若や、かつぽれなんかの假裝で押し出した。その中には例によつて、年を老つた藝者の、お酌すがたなんかも這入つてゐた。

その日政次郎は、前からの約束で、夕方から田圃の草津へ行く事になつてゐた。生憎その日は三時頃から雨が降り出して、灯火のつく時分には、すつかりもう本降りになつてゐた。

政次郎のために座敷は二階の廣間が取つてあつた。さうして政次郎が、狹山と二人で其處へ通ると、ぢきに廊下に賑やかな聲がして、はつ子や、吉彌や、その他の連中が五六人揃つて這入つて來た。その連中はみんな髮を若衆髷に結つて、萬字つなぎの揃ひを着てゐた。さうして窮屈な股引をはいて、曲がらない足を無理に曲げて坐わつた。——幇間の遊孝は今日は頭を圓くして、その中に交じつてゐた。

やがて坊主頭の宰領で、若衆髷の連中がみんな、畫間飛鳥山で踊つた、かつぽれや、深川踊ををどつた。三味線は幇間の細君の藝者と、もう一人の藝者が彈いた。——外の座敷からも、陽氣な三味線や太鼓の音がしめやかな夜の雨の中へきこえてゐた。

その踊がすむと幇間は、一人で二上りをうたつたり、もとの川崎屋の聲色をつかつたりした。藝者たちはそれには構はないで、政次郎と狹山を取卷いて、面白さうに畫間の話を初めた。——もうみんな、疲れて——草臥れきつてゐるやうに見えた。

政次郎はいい加減にして、その座敷を切り上げた。さうして、はつ子と、狹山と、三人になつて、池に面した靜かな座敷へうつつた。しかし狹山はそのばん、新橋まで人を送りに行かなければならないので、ひと足さきへ歸つた。

政次郎とはつ子は、狹山を玄關まで送り出してすぐに座敷へ歸つて來た。暗い池には、明るい灯影が雨の中に亂れてゐた。さうして池の向うに見える二階には、先刻政次郎の座敷にゐた連中の

騒いでゐるのが見えた――

政次郎とはつ子はいつものやうな二人に――「夢」のなかの二人になつて坐わつた。

『私は今夜かういふ事を考へたがね。』と、政次郎が云つた。

『どんな事です。』と、はつ子は腰に下げた更紗の提げ煙草入から、敷島を出して火をつけた。

『わかれる會つて云ふやうなものをやらうつて云ふんだがね。』

と政次郎は、はつ子のつけて呉れた煙草をふかした。

『どんな事をするんです。』

『今夜のやうにね。大勢知つた顔を集めて、もう思ひきり賑やかに騒ぐのさ。それでそれつきり二人はわかれてしまつて、もう會

はないつて事にするのさ。しかし、別かれるつて事は二人だけで、外の人は誰も知らないのさ。さうして二人は、他人の騒ぐのを默つて見てゐる。それつきり別れてしまふ――面白いだらう。』

『そんな事つまらないぢやありませんか。』と、はつ子が云つた。

『つまらないかい。』

『詰まりませんわ。――だけど、どうしてそんな心細いやうな事を考へるんです。』

『心細い事つたつて、さう考へるのが本當だよ。いつまでも今のやうに同じやうに會つてゐられるもんぢやあないものいつか一度はきつと離れるんだものね。』

『だけど本當かも知れませんけれど、――そりやあ餘計な心配つ

てもんぢやありませんか。』

『だけど私は、いつでも餘計な心配をしてゐる――』と政次郎はは つ子の顔をみた。

『そんな心配なんかしないで、安心してたらいいぢやありませんか。』

『解らない人だな――だつて安心が出來る位なら、心配しやあしない。安心が出來ないから心配するんぢやないか。』

『ぢやあ私が安心さして上げませう。』

『安心さして呉れる――と、政次郎が云つた。

『ええ。』

『きつと。』

『ええ、きつと。』

『本當に。』

『ええ、本當に。』と、はつ子が云つた。『だけどすこし暇がかかりますよ。』

『暇がかかる――』

『ええ、だつて手紙を書くんですから、書けるまで待つて下さらなくちや――』

『それを見りあや、安心が出來るんだね。』

『そりやあ、出來るか出來ないか解りませんけれど――』

『ああさうか。ぢやあ書いて呉れるんならいつまでも待てませう。』と、政次郎はふともう、その「安心」を得たやうな氣がした。

そのばん政次郎は、雨の中を深く車の幌につつまれて歸つた。

その「お花見」の日の、あくる日からである――はつ子からぱつたり消息がなくなつた。

三日や四日は電話がかからなくつても、何時ものやうに忙しいのだらうと、政次郎は思つてゐた。しかしそれが五日、六日となると、流石にすこし不安なやうになつて來た。

すると同時に、小てるの方からも、ぱつたり消息がなくなつた。

政次郎は不思議に思つた。

そのうちまた幾日かたつた。しかしまだはつ子からは手紙も

來なかつた。――電話もかかつて來なかつた。――勿論書くと云つた「安心」の手紙なんか來なかつた。

政次郎は堪らなくなつた。餘程會ひに行かうかと思つた。しかし會ひに行く前に、一度手紙を出さうと思つて――「私は、君が書くと云つた手紙を待つてゐる。さうして君がそれを書いて呉れるまで再び君に會はない。」といふやうな意味の事を書いた。

――政次郎は何日まででも、書けるまで待つと云つたけれど、しかしその手紙が直ぐにでも來るやうに思つたのである――

政次郎はこの手紙の返事を待つてゐた。しかしその返事も來なかつた。

小てるからも尙、何の音沙汰もなかつた。

「破局」――ふと政次郎は「破局」といふことを思つた。すべての事がみんな、何時かもう悲しい「破局」に到達してゐた――と政次郎は思つた。

政次郎は何ものかを捨てるやうな、何ものかを取り返すやうな心持で毎日のやうに芝居へ行つた。毎晩のやうに暗い街へ出て歩るいた。――ひと晩のやうなのは、自働車へ乘つて、大川の河岸を何處までも走らした。

すると或る日、不意に小てるから電話がかかつて來た。――それは蠣殼町の或る病院の看護婦からで、若しもおひまならば、烏渡來て頂きたいと云ふ言付である。

小てるは病氣なのであつた。

丁度、それは消息がなくなつてから、十四五日目位――二十日目位だつた。政次郎は店を早目に出て車に乘つてすぐに病院へ行つた。

『ちつとも知らなくつてね。』と、政次郎は小てるの枕許へ坐わつた。――うす暗い、長い廊下のはづれの二階を上がつて、小使に敎へられた二つ目の扉をあけると、其處が病室で、大きな眞靑な桐の葉が、明かるい硝子戸に、うつつてゐた。政次郎の姿を見ると、友禪の薄い搔卷をかけて、看護婦と何か話をしてゐた小てるは、蒲團の上へしづかに起き直つた。政次郎がそこへ坐るとぢき看護婦は何かとりに外へ出て行つた。

『あんまり暫らく電話もかけてこないから、如何したのかと思つてね――』

『ええ、お知らせするんでしたけれど――したかつたんですけれど、お母さんにどちら様へも云はない方がいいと云はれたんでせう。それから私もお知らせしちやあ悪いかと思つて、ご遠慮してしまつたんです。』と、小てるが云つた。

『すこし痩せましたね――一體、何日ここへは這入つたの――』

『今月の七日の日に這入つたんです。』

『今月の七日――ぢやあもう、ざつと一月になるのね――』

『ええ、さうなんです。』

『七日つて云ふと、その前に會つたのは――』

『あの水天宮様の日の夕方、つうちやんと三人でお詣りに行かうつて、行きましたわね――あれつきりです。』

『ああさう、五日の日に――』

『あの翌くるばん、五時のおやくそくがあつたんです。少し氣分が惡るかつたんですけれど、おやくそくですし、たいがいいつも無理をして通せますから、構はないと思つて、うけたんでせう。それに宴會ですから遲くなつたんです。あつちでもつて、堪らなく氣分が惡るくなつて、歸つて來たら、そのばんから熱が出たんです。さうしたら翌くる日からはもう夢中でわからなくなつて仕舞つて――病院へ來てからも、四五日つてものは、何んにも知らなかつたんです。』

小てるは細かに病氣になつた時の心持、入院した時の心持、——病院で暮らす心持を、政次郎に話して聞かせた。毎晩十二時——一時まで位づつ、明るい灯の中に起きてゐるのが、病院へ來ては、九時といふと門が閉まつてしまふので、宵から夜が更けてしまふ——廣い病院の中が、何處もかも暗く、ひつそりと寂靜まつてしまふと、廊下の遠くで上草履の音がする——氷をかく音がする。電燈が一つしか灯いてないで暗いのに、看護婦のお婆さんは一人で默つて、小説を讀んでゐる——

『ぢき出られるんだらうと思つてたのが、それがこんなに長くなつてしまつたんでせう。この頃ぢやあ、さびしくつてさびしくつて仕樣がないんですもの。昨日も一昨日も、一人で色んな事を考へて泣いてしまつたんですよ。色んな事を考へると、何だか譯もなく悲しくなつてしまふんですもの——』と、小てるが云つた。

『だけどもね。この間、人形町の通りで、つうちやんに會つたけれど、そのとき何んとも云つてなかつた——』と、政次郎が云つた。

『つうちやんも二三日前まで、私がここにゐる事を知らなかつたんですけれど、お座敷で姉さんに會つてやうやく聞いたんですよ、けれど用があつて來られないつて、昨日この寫眞を屆けて呉れたんです。』と、蒲團の下から、つる代のこの頃うつした寫眞を出して見せた。

『私がすつかり快くなつたら、またつうちやんと三人で、何處かへ遊びに行きませうね。』

『何處へ。』

『私いろいろ、色んな事を考へたんですよ。――何處かかう海のそばの、大きな家へ、三人で行つて毎日毎日遊んでたら、隨分いいだらうなんて思つたんですよ。』

『政次郎は默つて小てるの顏を見た。』

『それでね、その家は庭が廣くつて、綺麗な花なんかが澤山咲いてるんですよ。』

『なかなか御註文が六かしいんだね』と、政次郎は笑つた。

明るい「夢」――暗らい「夢」――、政次郎はふと考へた、小てるの夢は明るい。はつ子の夢は暗らい。さうして明るい方から暗らい方へだんだん引かれてゆく。――ふと政次郎ははつ子の消息

が絶えてる事をまた思ひ出した。

やがて看護婦が院長の廻診を知らして來た。

『ぢやあ私は歸りますよ』と、政次郎はそれを機に立ちかけてた。

『さうですか――』と小てるは殘惜しさうに政次郎の顏を見た。

『また遊びに來て下さいな――まだ一週間位は居なけりやあならないんですから』

『またぢき來ますよ。』

『明日また來て下さいませんか。』と、云つた。

『明日――』と、政次郎は小てるの顏を見た。

『ええ。』

『さうね。明日また來ませう。』

『本當ですか。』

『本當ですよ。』と、政次郎は思はず笑つた。

病院の門を出ると、空が蒼々と日が暮れかけてゐた。空は明るいが四邊はくらい。久松橋を渡ると、昏くなつた川の中にどこかもう夏らしい、乳色をした月がしづんでゐた。

明るい「夢」――暗らい「夢」――三人の「夢」はいつまで續くのだらうと、政次郎はかんがへてゐた。

八

小てるからは消息があつた――しかし、なほ、はつ子からは何の

消息もなかつた。

手紙も來ない――電話もかからない――政次郎はもう、疑ひをうたがつてゐる事は出來なくなつた。再び堪らなくなつて、會ひに行かうとした。

會ひに行くと、會へなかつた。はつ子に會へなかつたばかりでなく、吉彌にも會へなかつた。

一と晩置いて、そのあくる晩、政次郎はもう一度會ひに行つた。

――しかし、そのばんも政次郎ははつ子に會へなかつた。

二度會ひに行つて、二度とも會へない――二度とも「出たばかり」だと云ふ――二人はもういつも、かういふ風になるやうになるのだらうと、政次郎は思つた。しかし政次郎はせめて吉彌にだ

けでも會つて、落ちつきたいと思つた。さうして吉彌に會へば、すべて樣子が解る――すべて事情が解るだらうと思つた、それから暫らく待つて吉彌に會つた。

しかし吉彌に會つて見ると、吉彌の樣子はいつものと違つてゐなかつた。さうして別に政次郎の心持を忖るといふやうな處も見えなかつた。――そこには何にもないらしい。事情も、樣子も、何にもないらしい。ただ忙がしい平和な日が續いてばかりらしい。で、今夜は、はつ子はお客に連れられて、帝劇に行つてる事なんか平氣で話した。

その晩は、暗い、寂しい雨が降つてゐた――政次郎は、家へ歸るつもりで乘つて出た車を、途中から帝國劇場へ急がした。

政次郎は吉彌にわかれてすぐに大金を出た。

丸の内へ來るともう八時すぎ――九時に近かつた。番組の第二が濟んで、第三の喜劇が開かうといふ處だつた。政次郎は、はつ子に會はうとして、灯の明るい廊下の、賑やかな人の中を縫つてあるいた。

そのうちに開幕の管絃樂が重々しく響き出した。廊下の人達はみんな中へ這入り出した。しかし幾らさがしても、はつ子の姿は見當らない。政次郎は苛々して席へ這入らうとすると、入口のところで、ふと落ち合つた。

『あら――お一人。』と、はつ子が低い聲で云つた。政次郎は默つてうなづいた。

偶然、政次郎の席は、はつ子の席と同じ側だつた。政次郎は、どんなお客がはつ子を連れて來てゐるのかと思つて見ると、それは黑い色眼鏡をかけた、若い――二十六七の男だつた。そこにははつ子の外にまだ二人藝者がゐた――政次郎は舞臺を見ないで、その四人にばかり注意してゐた。はつ子は、其處に政次郎がゐるのを氣がつかないで、何處にゐるか探すらしかつた。

喜劇の幕がしまると、その四人は一緒に席を立つた。政次郎も一人でぼんやり後から立つて、廊下へ出ようとすると、入口のところにはつ子が立つて待つてゐた。

『先刻からいらしてたんですか。』と、云つた。

『いいえ――』と、政次郎は云つた。

『私ははもうこれで歸らなけりやあならないんです――濟みません。』

『私の手紙見た――』と、政次郎はいつぞや出した手紙の事を訊いた。

『手紙――何日ごろ下すつたんです。』

『十日ばかり前に――』

『いいえ、見ませんよ。』

『見ない――』

『ええ、知りません。』

『知らない――』と、政次郎は云ひかけたが、ふと氣がついて、

『お客樣が待つてるんだらう。早く行かなくつちあ惡いよ。』と

云つた。

『ええ。』と、はつ子は後を見た。『明日いらしつて下さいな。――すこしお話があるんですから――』と、云つた。政次郎は默つてうなづいた。

政次郎が二階へ上つて、窓から階下を見ると、丁度四人をのせた眞つ黑な自働車が、眞つ暗な雨の中を走つて行くのが見えた。

次の幕が開いたとき、政次郎は芝居を出てしまつた。さうして强い降りの中を、雨外套で凌いで、電車へ乘つた。

電車の中で政次郎は、暗い灯の中ではつ子に手紙を書いた。自分にも解らないやうな事を書いて出した。――政次郎は、今迄に嘗て覺えた事のないやうな、深い、悲しい、desperateな氣になつてゐた。

その翌くる日の夕方である。政次郎とはつ子とは一月ぶりで二人向ひ合つて坐てゐた。――『破局』――『破局』はまだ來なかつた。

はつ子はその會はなかつた一月の間の事を靜かに話した。政次郎は、默つて聞いてゐた。――しかしそのはつ子の云ふ事は、一々政次郎の胸にこたへる事ばかりだつた。政次郎は聞いて驚いた。――やがて傷ましくなつた。

『それぢやあ、私の手紙は、行つた事は行つたんだね。』と、政次郎が云つた。

『ええ、來た事は來たんですけれど、小母さんが何處かへやつちやたつて云ふんです。』と、はつ子が云つた。

『――だつて電話をかけに行きやあ、電話にも張り番がつくんですもの。』

政次郎は思はず、はつ子の顔を見た。――はつ子は默つて下を向いた。――二人の「夢」の周圍は、何時か大勢の人に取卷かれてゐた。さうして二人は、いつか悲しい「苦勞」の中に置かれてゐたのである。

雨上りの空は、青く、あかるく晴れてゐた。しかしもう窓の外には夕影が昏く迫つて來てゐた。政次郎が立つてその窓のところに腰をかけると、はつ子も來てそこへ腰をかけた。

『もう夏ですね。』と、はつ子は、ふと、政次郎の膝の上へ手を置いた。

『さうね。』と、政次郎は云つた。――二人はふと、二人の膝の上へ手を組み合つて、さうやつて暫らく默つてゐた。

『「安心」の手紙を書く筈だつたね。』と、政次郎が笑ひながら云つた。

『ええ――だけど書けないからもういいでせう。』

『もう書かなくてもいいよ。』と、政次郎が云つた。二人の心持は暗らいままに「夢」の中に溶け合つたやうになつて、政次郎は全く「安心」を得たやうな氣になつた。

二人はそれから膳を並べて、一緒に夕飯をたべた。それから二人で外へ出た。

丁度その日は、五月の三十二日で、お富士様の日だつた。新道から千束町の通りへ出ると、何處か明るい、賑やかな、夏の夕方の心持がざわざわうごいてゐた。

大金の前を通つて富士横町へ這入ると、狹い横町の兩側に飴屋や、鬼灯屋や、簪屋や、燈籠屋がぎつしり並んで店を出してゐた。まだ薄あかるい夕闇の中に、油燈や洋燈の灯火が赤くついてゐた。植木屋は露に濡れた夏菊や百合なんかの花を並べてゐた。その間を白い浴衣を着た人がもうぞろぞろ出初めてゐた。

『綺麗ですわね。』と、はつ子がふと金魚屋の荷の前に足をとめた。水を一杯張つた玻璃の鉢の中に、灯火がすずしく浮いてゐる。

『買はうか。』と、政次郎が、ふと云つた。

『ええ。』と、はつ子もふと答へた。

それから二人は、赤い絲のついた小さな金魚の珠を買つて、人込の中を下げてあるいた。――政次郎は世帶をもつた、若い、貧しい男と女が二人で外へ出て、夜金魚を買ふといふ、誰かの小說の話を思ひ出した。

『およねさんは、このせつ如何なんです。』とはつ子が云ひかけた。

『今月の初めつから、身體が惡くつて病院へはいつてゐる――』

『よつぽど惡いやうなんですか――』

『もう快くはなつたんだけれど、二三日うちに轉地しなくつちやあ、いけないんだとか云つてたけどもね――』

『御見舞に行つてお上げなさいよ。』と、はつ子が云つた。

明るい「夢」――暗らい「夢」――四邊はだんだん昏くなつたが、空はまだ薄青く晴れてゐた。

二人はやがて、人込から横に切れて、暗らいしづかな横町へまた這入つた。（四十五年七月）

川波

『君はね、「夜の宿」をやつた自由劇場のときの事を覺えてゐないかい。』と、Sが云ひました。――ごぞんじかも知れませんが、Sは小説や芝居なんか書いてる、まだ若い男なんでご座います。

「夜の宿」をやつた自由劇場のときの事――』

急に、思ひつかない事を云はれたんで、私はかんがへました。しかし何があつたか、別にどうもこれぞと云つて、覺えてゐるいふやうな事は、何んにもないんでご座います。

『去年――一昨年あれはたしか一昨年だつたね』

『ああ一昨年――。私がまだ學校へ行つてた時分だから、一昨年の丁度暮だ。あの時の事で、君は覺えてゐないかねえ――』

『さあね、――何かあつたかねえ』

『有樂町の停車場で待ち合はして、二人で一緒に行つた、あの時の事だけれど――。』

『それは覺えてゐる、――一緒に行つて、それから君がそのとき、しきりに齒を痛がつた事を覺えてゐるけれどね、――さあ、何があつたつけねえ』

『そのとき後で、私が君にたしか話した事があるんだけれど――』

『話した事――さうだつたつけねえ、覺えてゐないな。』

『あのときね、私たちのゐた席のすぐ前の側に、若い藝者が四五人並んでゐた事を覺えてゐないかい。』

『さあ、さうだつたかね。』

『その藝者のなかにね、一人、痩せたきれいなお酌がゐて――その お酌の事を、あとで君に話したんだがね――覺えてゐないかい。』

『お酌の事を――』

さうきくと私は、なんか思ひ出したやうにもおもはれます。

『さうだね、さう云はれりやあ、何んかそんな事を聞いた事もあつたやうだけれど――しかしまた、何んだつて今頃、そんな舊い事を云ひ出したんだ。』

『うむ、――しかし、あのときの事を、覺えてゐないんぢやあ仕樣が

ない――』

『何んかまた初まつたのかい』

私は笑つてSの顔を見ました。――Sは大學では哲學の方をやつてたんですけれど、哲學をやつたには似合はず、果敢ないSentimentalismをたよりにして生きてるといふ、何なんでご座います。夢のかなしみに溺れてゐるんだ――と、惡口を誰れかが云つた事がありましたけれど、しかし時々、思ひもよらない事に、思ひもよらない心持を裏づけて、一人で色々、かんがへてゐるんでご座います。

『うむ――すこし思ひがけない話が出來てね。』と、Sは考へ深いやうな眼を上げました。

『どんな話――』

『いえね、――初めから話さなけりやあ解らないけれど、――實はね、かうなんだ。』と、話しだしました。

『今日――先刻、お晝すこしすぎだつた。私が少し買物があつたんで丸善へ行くと、階下のところで偶然B君に逢つた。君も知つてるだらうけれど、B君はもう明後日、亞米利加に立つんで、昨夜もその送別會があつたんだがね、なんかやつぱり買物に來て、丁度歸るところだつたんだ。すぐ歸るのかと云ふから、歸ると云ふと、それぢやあ今日はこれから、藥研堀の友だちの家まで行くから、其處まで一緒に行かうつて云ふんだ。それから電車で一緒に途中まで來た。

B君は淺草橋の手前で下りた。私は別れてずうつと家へ歸つ

たけれど、何んにも別にする事もないから、もう一度また外へ出ようと思つてると、丁度其處へ今別れてきたB君から電話が掛かつて來た。

「先刻は失禮、實は今、藥研堀の友達と一緒に、深川亭へ來たが、友だちが是非一度君に逢ひたいと云ふから、都合がよかつたらすぐ來て呉れないか」と、云つて來たんだ。

とにかく明後日立つてしまふと、もう暫らく――三四年は會へない。――それにはまた、聞いて置きたい用もあつたんで、

「ぢやあ、ぢきに伺ひます」と云つて、私は電話を切つて、――それからすぐに、とにかく出かけた。

そのときね。深川亭と聞いたとき、私はすぐ、ふと或る事を――

一寸或る事をかんがへた。それはね、少し話が込み入るけれど、實は私は柳橋に一人、すこし譯があつて、一度會ひたいと思つて、――會つて見たいと思つて、二三年前から内々さがしてゐたお酌があるんだ。――譯つて云つたつて、別にそんな大した譯ぢやあないんだけれどね、――

實は――それは、以前私がまだ小學校へ行つてる時分、私の家の横町に、貸本屋をしてゐた家の小さな娘が、その後柳橋からお酌に出た事を知つてるんだ。――斷つて置くけれどもね、しかし其處には世間並の「追憶」の種になるやうな、氣のきいたやうな事があるんぢやない。私が十四五の時分に、とにかくその娘は、まだやうやう十か十一位にしかならなかつたんだから――實を云ふと

私は、その娘の名前も知らなかつた。ただ色の白い、花車なすがたの子だと思つてた。

姉さんが一人あつたけれど、その姉さんはもうその時分、私と同い年齢かまた少し上か位で、柳橋からお酌に出てゐた。ときどき襟のかかつた着物に、桃割に髪を結つて、その貸本屋の家に遊びに來た事を覺えてゐる。そのお酌の姉さんが遊びに來ると、その妹と一緒に、二人で仲よく、公園なんかによく遊びに行くといふやうな風だつた。

家では貸本屋をやつて、お父さんつて云ふ人はまた、何處かの芝居の狂言方かなんかしてゐた。しかし私が覺えて、ぢき芝居の方は止してしまつたらしかつた。初めつからその妹の娘の方も、

姉さんと同んなしやうに、藝者にするつもりで、その時分、やつぱり近所にあつた踊の師匠に通はしてた。學校から歸ると、着物をきかへて、手拭に扇をつつんだのを持つて、苦のなささうな顔をして、毎日私の家の見世の前を、お師匠さんとこへ通つたことを覺えてゐる。

しかしね、今も云つた通り、私とその娘の間には、何んの交渉もないんで、――なんの夢もなかつたんだけれど、しかし「あの子は藝者になるんだ」といふ、その藝者になるといふ事に、――考へて見れば莫迦な話だけれど、その時分私は一人で人知れず、心をいたましめてしまつたんで、なんだかその娘が、一日一日とだんだん自分の側から離れて行つて、自分たちの一生立ち入ることの出來ない

やうな、遠い、外の世界へ行つてしまふのを、眼のあたりに、まざまざと見なければならないやうに思つたんで、――なんだか情ないやうな、味氣ないやうなまた嫉ましいやうな氣になつたんでね。――しかし考へて見ると、こんな個所は私は今とあんまり違つてゐないけれどねえ。

するとね、そのうち、私が中學へ這入つて、たしか二年か三年か位な時分だつた。横町の樣子がどんどん變つて來て、その貸本屋のうちも、いつか何處かへ越していつてしまつた。しかし越してしまつても、やつぱり何處か近間にゐるんだと見えて、その後もちよいちよいその娘が稽古に行く姿が見えたが、其うち、一年たち、二年たちするうちに、だんだん見えなくなつて來て、私もさう何時まで

覺えてゐやあしない。いつ忘れるとなしに、ぢき忘れてしまつた。

それからまあ七八年たつたんだ。その間に私は、別に何事もなく、至つて平和に中學を出て、まあ大學へ這入つた。何事もなかつただけに、その間の私の身のまはりは、明るくもなければ、暗くもなく、要するに影の薄い、色のうすい月日を送つてゐた。すると忘れもしない一昨年なんだ。暮れに自由劇場があつたんで有樂座に行くと、丁度自分の席のすぐ前の側に、若い藝者が五六人花のやうに並んでゐた。――君と一緒に行つたあのときさ。

自由劇場と藝者――考へりやあ、別に不思議なことは何んにもないんだけれど、その時分だからまだ、實は私はすこし、正直におどろいたんだ。ことに私はあのとき自由劇場に初めて行つたんで、

どんな樣子だか、樣子をちつとも知らない處へ、會員席の眞中に、そんな花のやうな群が片まつてゐるんだから――しかし、それよりも尙おどろいたのは、その五六人の中に、一人まじつてゐたお酌の顏を見ると、思ひがけない、それは七八年前に、私の心をいたましめた、横町の貸本屋の娘なんぢやあないか。

私はおどろいたよりも何より、なんだか自分がそのとき、痛ましくなつた。向うは、昔のままの花車なすがたで、七八年のうちに思ひ通りきれいな品のいい、立派なお酌になつてしまつた。しかし私はまだ、そのとき學校にぶらぶらしてゐて、行末をかんがへると、心細いことばかりで、見込もなんにも立つてない、――一體どうなるんだか、自分で自分が解らないといふ有樣にゐたんだらう。――

かんがへたら、自分の身がつくづく果敢なくなつてしまつて、そのとき幕があいて芝居が初まつたけれど、芝居がちつとも身に染みて見られなかつた。勿論向うぢやあ、私の顏なんか覺えてゐやあしない。覺えてゐる筈もないんだから。だからまさか自分のうしろで、自分のために、こんな事をかんがへて、こんな悲哀をかんじた男があつたとは、全く夢にも思はなかつたらう。

しかしね、この自由劇場で會つてから、一度忘れてしまつたのを、また思ひ出したんでね。とにかく柳橋から出てゐるつて云ふ事はたしかなんだけれど、さあ柳橋で、何んといふ家から、なんといふ名で出てゐるんだらうと、私はかんがへ出した。どんなコンデイションにゐるんだか。何んだかそれも知りたい。せめて名だけ

でも解りやあ、誰れか柳橋に遊びに行く人にきいて、どんな樣子か解らない事はないだらうと思つたんだ。

するとね、また、妙なもんで、それからつて云ふものは、よく方々でその姿を見かける樣になつた。芝居で一度か二度、表で二三度——そのころ兩國の本屋まで、ときどき行つたもんだから、行きかかへりかに、代地を通るんだ。すると柳橋のあたりで、二三度桃割に結つてあるいてるのを見かけた。一度のやうなのは柳橋のところの河岸を通つたとき、長唄かなんか浚つてる家があるんで、なんの氣なしに格子の中を見ると、その途端に格子があいて、叮嚀に挨拶しながら、そのお酌のすがたが中から出て來た事があつた。——このときは私は自分一人でおどろいた。しかし私はそのとき思

はず二三度ふりかへつてその後ろすがたを見送つたがね。あれはたしか去年の秋——たしか今時分だつたと思ふ——

興味——要するに興味なんだらうねえ。興味とでも云ふもんなんだらうねえ。しかし、さうなると云ふと、その興味がだんだん濃くなつて來たんだ。いよいよ何んといふ名だか、名前が知りたくなつた。もしか雜誌の口繪に寫眞でも出てゐやあしないかと思つて、文藝倶樂部なんか見るたんびに、出來るだけ氣をつけて探すやうにしたけれど、しかしどうも意地わるく見付からない。それにまた、新橋通や葭町通は、其處いらに大勢ゐるけれど、生憎柳橋通はさがしたけれど誰れもゐないんだ。

どうしたら解るんだらうと思つた。——しかし何うかんがへ

ても、解りさうがない。それにかう妙に拗れてしまつちやあ、とても解りやうがないと思つた。——しかしまた、さう云つて、何んだかかう何日か一度、それが解る日の來るやうな氣もする。自然といつか、解るやうな氣がする。今だから云ふけれど、まあ色んな事を——隨分色んな事を、勝手に、かんがへたんだ。

しかしそのうち、だんだんその興味の色が褪めて來て、あんまり氣にならなくなつて來た。その所爲だかどうだか知らないけれど、——その所爲つて云ふ事もあるまいけれど、さう氣にならなくなつたら、その後あんまり、その姿を見かけなくなつた。三味線ぢやあないけれど、こんな事でも、かん所が一つ外れるといふと、心持がばらばらになつてしまふんでねえ。忘れるともなく、だんだん

わすれていつてしまつて、——それからはあんまり考へなくなつてしまつた。でもしかし、それでも何んかあるとそのたびにときどきは思ひ出した——

でまあ、話がたいへんに長くなつてしまつたけれど、B君から電話がかかつて來て、深川亭といふ事をきいたとき、私はすぐにふと、この事を思ひ出したんだ。

實を云ふと、私は柳橋の土地へ這入ることは初めてなんだ。機會がありさうで、機會がなくつて、今まで一度も行つた事がなかつた。しかし、初めて行くんだけれど、今日行つたら、なんかかう手がかりがつく——なんかその手がかりがついて解るんぢやあないかといふやうに思つた。いよいよ解る日が來たんぢやあないか

と思つた。――考へて見りやあ、隨分ヨタな、莫迦な、話だけれど、とにかく何んだかそんな氣が、ふと胸のなかに浮んだんだ。さうしたら、何時か自分も知らないうちに、すつかりもうそんな氣になつてしまつてた。途々もぼんやり、そんな事をかんがへながら、私はぶらぶら代地まであるいてしまつたんでね。

私が這入つて行くとすぐと、「Tさんのお連樣でゐらつしやいますか。」と女中が待つててすぐに廊下を案内して呉れた。Tさんと云ふのは、B君の、その藥研堀の友だちのひとの名なんだ。まだとにかく二時すこしすぎた位なもんなんだから、四邊はなんとなく閒寂と、うす暗くしづまつてゐる。廊下のはづれの唐紙をあけると、大川に向つた、明るい、しづかな座敷の中に、B君と、Tさんと

が、二人で女中を相手に話をしてゐた。――そこには藝者らしいすがたは別にまだ見えなかつた。

「遲かつたぢやありませんか。ぢきだつて云ふから、そのつもりで待つてたんですよ。」と、座敷へ這入るとすぐ、いつもの調子でB君にやられた。まさか、ぼんやりと取りとめのない事をかんがへながら、あるいて來たもんだからとも云へないから、私は一寸返事に困つてしまつた。するとB君は、

「いえね、貴方は忙がしいんだらうと思つたんですけれど、この男が是非逢ひたいつて云つたもんだから、一寸電話をかけたんです。」と、Tさんを引合はして呉れた。私は前に一度か二度何處かで逢つた事はあるんだけれど、今日初めて改まつて引合はされたのだ。

家は藥研堀の羅紗問屋かなんかだけれど、見世の方は獨逸からかへつて來た兄さんがやつてるんで、Tさんは自分は好きな繪を描いて遊んでゐればいい、氣樂な身分の人なんだ。Bぃ君と殆んど同じ位に中學を出だんだから、私より二三年先輩なんで、――繪は中學にゐる時分から好きだつたんだが、油繪でも水彩でも、道樂半分やつたのとは思へない位器用に描く。私は誰れかのところで、一二枚描いたのを見たことがある。しかし道樂ばかり強くつて、眞面目になつて製作なんかしようつて云ふ氣にはなれないのらしいんなんだ。

「Bぃさんが彼方にいらしてしまつても、どうぞこれから、ちと宅へお遊びにいらして下さいまし。始終遊んで居りますから。」と云ふから、

「有難うご座います。貴方もあちらの方へいらしたらどうぞ――」と云ふと、

「實は私は、お宅の方へは時々參るんでご座います。」と云つた。

「お稽古に行くのかい。」と、側からBぃ君が冷やかした。

「いいえ、お稽古ぢやあない。この頃はすこし「暫」の古い錦繪をあつめてゐてね、門跡樣のそばにそんな繪が澤山ある古本屋があるもんだから、ときどき遊びがてら、あつちの方へ行つて見るんだ。」と、言譯した。

「ねえS君、この男はときどき心得ちがひな事をやるんでしてね、近ごろはたいへんに富本とかなんかに夢中になつてるんださう

です。――しかし繪を描くよりは、三味線を彈いてる方が、見込があるんださうです。」と、B君が私に云つた。Tさんは、

「常談云つちやあいけません。」と、顏をすこし紅くして、音なしく笑つた。

一昨日の暴風雨で、大川の面はまだすつかり濁つてゐる。さうして、流れがかう、まだいたましいやうに迅い。後ろの障子を一枚あけて見ると、今日はまだ空が一杯に曇つてしまつたので、向う河岸の古い屋敷塀や倉庫の景色が、何か悲しい夢でも見たあとのやうに、どんより心細く默つてゐるやうに、見える。

「あの國技館も、出來た當座は氣になつて、氣になつて仕樣がなかつたけれど、毎日毎日見てゐるうちに、あのあんまり不恰好な樣子

がだんだんなんだか可哀想になつて來ました。」と、Tさんが云つた。さう云はれて見ると、なるほど、曇つた空に壓されて、大きな薄青い屋根がひろがつてゐるのが寂しさうだ。――しかし、何んだねえ、水のそばへ行くと、やつぱりもう冬だねえ。

そこへ女中が、お銚子を持つて這入つて來た。

「實はね、貴方の來る前まで、いろいろK先生の話を聞いてゐたんですよ。」と、B君が、女中の顏を見ると、思ひだしたやうに云つた。

「K先生の話――ああ何んですか、あの噂になつた藝者の事ですか。」

「ええあの事――。なんですか、先生はこの頃でもお見えになりますか。」と、B君が女中に訊いた。

「いいえ、この頃は暫らくお見えになりません。お見えになるときは、大概いつも、誰方かお連れがおありなさいます。」と、女中が云つた。

「だけど、あれは何ういふんでせう。あの噂は事實だつたんでせうか。」と、私が云つた。

「まつたく嘘ぢやあなかつたんでせう。」と、B君が云つた。

「さうでせうかねえ。」

「私はあのふみ子つて藝者を知つてますけれど、品のいい、しづかな何處かK先生のお書きになるものに似たところのある藝者ですよ。なるほどあれならK先生のお氣に召すかも知れません。」と、Tさんが云つた。

「どんな藝者だか、一度會つて見たう御座んすね。」と、女中が立つて行つたあとで、B君が私に云つた。すると、

「一つ呼んで見ませうか。」と、Tさんが云つた。

「しかし何んぢやあないんですか。其藝者はもうこの春か死んでしまつたんぢやないんですか。」と、それから私が云つた。——私は新聞かなんかでさう云ふ事を見て、そのときまで、もう死んだものだと思つてゐたのだ。

「いいえ、可哀さうに、まだちやんと生きて居りますよ。」とTさんが云つた。

「さうですか。しかし私は春ごろ新聞で、そんな事を、——ふみ子と云ふ若い藝者が死んだつて云ふ事を見たと覺えてゐますけれ

ど――それにその當時A先生から、K先生が始終呼んでゐた藝者が死んだんで、そのお葬ひをわざわざ送つてつたといふやうな事を聞きましたけれども。なんでもそのお葬ひの日が春雨の降つた日で紅い椿の花なんかが、しとしとと濡れて行つたのが、なんとも云へない氣がしたと、あとでK先生が云つたといふやうな事まで聞きましたけれど――」

かう私が云ふと、

「ああそりやあ違ひます。そりやあふみ子ぢやあありません。死んだと云ふのは、そりやあ、小ふみつて云ふ藝者なんぢやありませんか。」と、Tさんが云つた。

さう云はれて初めてわかつた。私はふみ子と、小ふみと、まちがへてゐたんだ。しかし小ふみも先生のお座敷へはよく出たんださうだ。

それからまあ、そのふみ子を呼んでみる事になつた。Tさんは都合をききに出て行つた。

時々、ぎい、ぎい――といふ舟の音と、それから水の音とが、障子のそとに近くきこえる。兩國の方から、横網の方へ行く蒸汽が、深く濁つた波を搔きわけながら、向うの方を通つてゐる。――私はどういふもんだか、曇つてくらい日に川の波が重さうにうごいてゐるのを見ると、いつでも、何んか古い事でも思ひ出させられるやうに、悲しい心をそそられていけない。

「實はね、かう云ふ話があるんですがね。」と、私はふと笑ひながら、

B君に、さつき云つた貸本屋の娘の事を話した。

「へえ、そりやあ面白うござんすね。そのお酌も一つ呼んで見ようぢやありませんか。」と、B君は私の顔を見た。

「しかし、出てゐる家もわからなければ、名前もわからないんですからね。」

「さうですね、しかし何んとかしてそりやあ探がして見たいもんですね。」

「しかし芝居の狂言方の娘で貸本屋の娘だけぢやあ、いくらなんでも無理でせう。」

「とにかくTに訊いて見ませうよ。」

「そりやあとでも、解りやしませんよ。」と私は笑つた。先刻はどうしてあんな氣に――あんな張りつめた氣になつたんだか解らない。――不思議だ。先刻の心持をかんがへると、なんだか心持が夢のやうに白けてゐる。

Tさんが座敷へ這入つてくると、ぢきあとから女中が這入つて來て、Tさんに耳うちをした。

「ふみ子は來られるさうです。」と、Tさんが云つた。

B君はそれから、Tさんに私が今した話をした。

「君は詳しいから解るだらうと思つて、――」

「常談いつて、――そんなに詳しかあありませんよ。」と、Tさんは笑つた。

「しかし、たしかに柳橋にゐるんですか。」

「さあ、たしかつて云はれると困るんですけれど、まあとにかく順序から考へると、柳橋だらうと思ふんですけれど。」と、私は云つた。

「さうですね、困りましたね、そりやあ私には、とても解りさうもありませんから、いづれさがさして置きませう。」と、Tさんが笑つた。

それからTさんは女中と二人で、今來るふみ子の事や、私がまちがへてた、死んだ小ふみの事なんかを話し出した。Tさんはふみ子に會つたのは一度か二度だけれど、その小ふみにはTさんの連中がみんな好きだつたんで、たびたび呼んでよく知つてゐた。しかし去年の十一月の末、一本になつてわづか二月か三月するうち急に身體が惡くなつて、今年の二月末、とうとう果敢なくなつてしまつた。十八やそこいらで死ぬ位だから大へんに身體が弱々し

かつた。しかし若いに似ず、三味線がすきで、Tさんが何處かへ行つて、澁い小唄のやうなものを仕入れてくると、小ふみはいつも喜んでTさんにそれを敎へて貰つた。――そんな事を色々女中と二人でTさんが話し合つた。B君と私は、默つて側でそれを聞いてゐた。

「ほんとに惜しい事をいたしましたねえ。」と、女中がいまさらのやうに云つた。

「あの妓が死んでしまつてからもしばらく、橋の際のあの寫眞屋の窓に、あの妓の寫眞が大きく出てゐた。私はそれが氣になつてね。あすこの前を通るたんびに、まだあやつて出てゐるから、妾があやつて殘つてゐるんだけれど、やがてあの寫眞が、あの窓か